No. 002

2003年度

第3回NGO−JICA合同ワークショップ

地域で活かす、地域を活かす、国際協力
—誰のための参加型開発？—

実施報告書

平成16年3月

JICA LIBRARY
1178601【9】

独立行政法人国際協力機構（JICA）
九州国際センター

九 州 セ
JR
03-03

はじめに

1970年代末以降のインドシナ難民支援を契機に増加した日本のＮＧＯ・ＮＰＯは、1995年の阪神大震災での被災地の救援活動により、広く一般にその存在を知られることとなりました。以来、日本社会におけるそれら団体への期待と要望が年々高まっています。一方、国際社会では、ＮＧＯ・ＮＰＯの活動なくして国際協力の世界を語ることができないほどの存在となっています。一昨年８月、南アフリカ・ヨハネスブルクで開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議」でも、ＮＧＯ・ＮＰＯの存在・活動が地球規模の課題である環境問題・貧困問題等の解決に重要な位置を占めることが再確認されました。

ＪＩＣＡは国の行政改革の一環として、平成15年10月１日より独立行政法人国際協力機構として新たな出発をいたしました。より一層の効率性・透明性の追求、復興支援業務の強化という柱に加え、ＮＧＯ、地方自治体、大学等、様々なプレーヤーと協力しながら、従来以上に市民レベルでの国際協力を推進することが大きな柱となっています。この市民参加型国際協力の中心として、ＮＧＯとの相互理解、パートナーシップが求められています。それには、市民レベルで活動するＮＧＯとの相互理解、パートナーシップが欠かせないものとなっています。

このような中で、一昨年、昨年に引き続き、九州地区の第３回ＮＧＯ-ＪＩＣＡ合同ワークショップを、ＮＧＯ福岡ネットワークを始めとする関係者と共同で開催しました。九州地区のＮＧＯ・ＮＰＯは比較的小規模な団体が多い中、今回、海外での活動を見越したより実践的な能力向上を視野に入れ、現在の国際協力の潮流となっている参加型開発を考えるフィールドワークを湯布院で実施しました。湯布院でのまちづくりの経験を学ぶことで、参加者はまちづくりに不可欠な要素が、海外での国際協力にも共通することを改めて認識することとなりました。

本ワークショップを通して、更なるネットワークと協力関係の強化ができますことを願うとともに、相互の活動の更なる発展を期待しております。

最後に、報告書のとりまとめにご尽力下さった方々に感謝の意を表するとともに、本ワークショップの開催に多大なるご協力を頂いた湯布院の関係者各位、準備委員会、各ＮＧＯ団体、他関係各位に対し、甚句の謝意を表する次第です。

平成16年３月

独立行政法人国際協力機構
九州国際センター

所長　**山口　三郎**

1178601[9]

目　次

Ⅰ　ワークショップ概要

１．実施要項 …… 1

２．全体日程 …… 2

Ⅱ　フィールドワーク

１．オリエンテーション（ＪＩＣＡ九州）……3

２．アイスブレーキング ……4

３．オリエンテーション（湯布院）……7

４．フィールド調査…… 8

５．講義（参加型開発再考）……11

６．講義(湯布院について)……13

７．グループワーク ……15

８．グループ発表 ……16

Ⅲ　ＪＩＣＡ草の根事業説明会

１．事業説明 ……27

２．事例紹介 ……29

（１）鉤虫対策プロジェクト

（２）持続可能なマルチ稲作栽培

Ⅳ　ワークショップ評価

１．意見交換会 ……33

２．アンケート集計結果 ……35

３．レポート抜粋 ……41

Ⅴ　参考資料

1．参加者リスト
2．準備委員会リスト
3．募集要項
4．講師レジュメ
5．平成14年度　湯布院町交通社会実験報告書（概要版）
6．ゆふいんおさんぽマップ

Ⅰ．ワークショップ概要

Ⅰ　ワークショップ概要

１．実施要項

（１）実施目的

①ＮＧＯ及びＪＩＣＡ等の関係諸機関が、お互いの目的・活動内容・課題等について理解を深める。

②ＮＧＯ及びＪＩＣＡ等の関係諸機関の今後の活動をよりよいものにするため、地域づくりの実践事例を通じて、「参加」の意味と経験を共有する。

③国際協力活動に携わるＮＧＯ及びＪＩＣＡ関係者の能力向上と新たな連携の構築を目指す。

（２）実施日時

平成16年１月30日（金）～２月１日（日）

（３）実施場所

第１日目　　ＪＩＣＡ九州（北九州市八幡東区）
第２・３日目　クアージュ湯布院（大分郡湯布院町）

（４）主催

第３回ＮＧＯ-ＪＩＣＡ合同ワークショップ準備委員会
ＮＧＯ福岡ネットワーク及びＪＩＣＡ九州

（５）後援団体

福岡県、北九州市、大分県、湯布院町
（財）福岡県国際交流センター、（財）北九州国際交流協会
（財）大分県国際交流センター

（６）内容・対象

九州７県内の国際協力に従事するＮＧＯ及びＪＩＣＡ等スタッフ

2．全体日程

1月 30 日(金)	於:JICA九州
19:30	オリエンテーション
20:00	アイスブレーキング
21:00 ～ 22:00	湯布院ビデオ鑑賞 ①観光ビデオ ②プロジェクトX
1月 31 日(土)	於:湯布院
10:00	オリエンテーション 講師:米田誠司氏(由布院観光総合事務所事務局 溝口隆信氏(湯布院町総合政策局係長) インタビューに向けた準備
11:00	①インタビュー ②フィールド調査(湯布院の町内を自由インタビュー及び散策)
14:30	グループまとめ
15:00	講義「参加型開発再考」 講師:毛受敏浩氏 ((財)日本国際交流センター)
16:10	講義「湯布院について」 講師:中谷健太郎氏 (亀の井別荘主人)
17:10	グループワーク
19:00	懇親会
20:30 ～ 任意	グループワークの続き
2月1日(日)	
9:00	グループ発表準備
10:00	グループ発表
12:00	グループ発表講評
12:30	昼食
13:30	草の根技術協力紹介 坂部英孝(JICA業務課職員)
14:00	草の根技術協力事例紹介、質疑応答 講師:木村浩純氏(地球緑化の会) 帖佐理子氏(じゃっど)
15:45	意見交換会
17:00	閉会

Ⅱ．フィールドワーク

Ⅱ　フィールドワーク

１．オリエンテーション（ＪＩＣＡ九州）

３日間のワークショップを行うにあたり、日程、目的、趣旨の確認を行った。趣旨として、以下のように参加者に伝えた。

まず、参加型をテーマとした経緯についてである。参加型開発の手法や、住民のニーズ重視という考え方は、国際協力の現場で重要だといわれて久しい。一方、こういった考え方は、日本の地域開発、まちづくりにおいても同様に重要であり、各地で実践例も存在している。国が違うとはいえ、日本の地域が抱えている問題と、海外の協力現場が抱えている問題とは、本質的には共通する部分がある。日本の地域を題材にして、そこでの「参加」について学び、考えることは、国際協力活動に携わる私たちにとっても意味があり、これからの国際協力活動へ活かしていけると考えた。

フィールドを湯布院にした理由については、湯布院は温泉地としてだけでなく、「まちづくり先進地」として有名であり、その町を創りあげるには様々な人たちが関わってきたことが挙げられる。そしてこれからも様々な人たちとの関わりの中で、その町は変化していくであろう。実際に湯布院で何が起こっているのか、そこにいる人達は湯布院に何を望んでいるのか、その実現のために誰がどのようにかかわっているかなどを、参加者自身が直接聞き出して、参加とは何か、開発とは何かを考えるワークショップとしたいと考えた。まちづくりの結果ではなく、現在も試行錯誤しながらまちづくりを進行させている湯布院へ、まちづくりのプロセスを学びに行く。

２.アイスブレーキング

①部屋の四隅

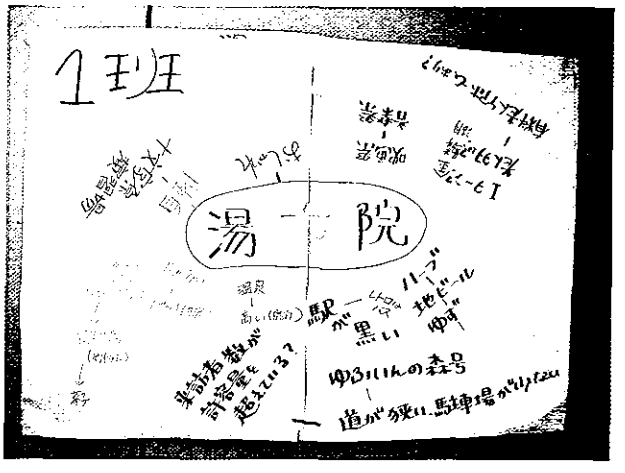
お互いを知るため、「部屋の四隅」をおこなった。これは、ファシリテーターの質問に対し、４つの答えを用意し、参加者が自分の考えに合致する場所（部屋の四隅）に移動するというアクティビティである。

「湯布院へ行ったことあるか」という問いには「２、３回ある」が最多であったが、一方で「数回ある」「一度もない」という参加者も少なくはなかった。ファシリテーターが参加者にコメントを求めると、「数回ある」と答えた方は、「家族で何度も行っている」「美術館が好きなのでよく行く」などの答えであった。また「一度もない」の方には、「一度は行ってみたいと思っていた。」という方が多かった。ちなみに、「湯布院」を知らない参加者はおらず、知名度の高さが伺えた。「血液型は何型か?」という問いでは、ＮＧＯ福岡ネットワーク関係者にはＢ型が多く、国際協力推進員全員がＡ型であるいうことが分かり、参加者の笑いを誘った。最後の質問「ワークショップに参加するにあたり、オリエンテーションの説明でよく分からなかった、不明な点がある」に対し「はい」と答えた参加者からは「湯布院での経験を如何にＮＧＯ活動につなげるか」「インタビューで話がうまく聞き出せるか」「途上国と湯布院の問題が本質的に同じはどういうことか。」というコメントが聞かれた。

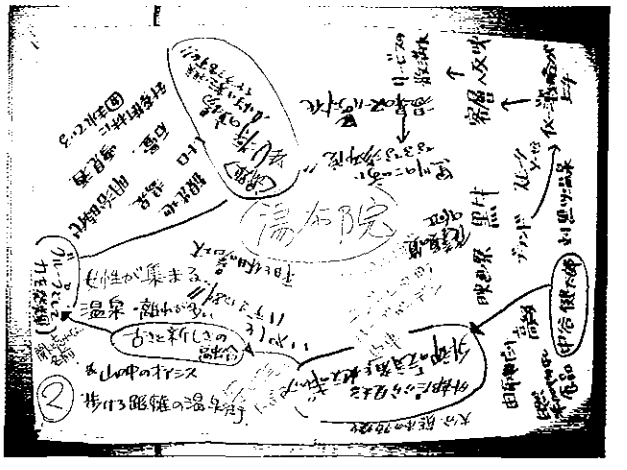
②ブレーンストーミング「湯布院のイメージ」

緊張がほぐれ、ワークショップへ意識が向いたところで、グループに分かれ「湯布院のイメージ」についてブレーンストーミングをおこなった。「湯布院」と聞いて思い浮かぶものをあるかぎり、言葉や絵で模造紙の上に表現していった。「観光地として成功、たくさんの観光客が訪れる」「高級旅館」「古民家レストラン」「温泉」「女性に人気」「美術館がたくさんある」というイメージを持つ参加者多かった。何度か湯布院を訪れたことのある参加者からは「ハローキティの土産物」「自衛隊駐屯地」という意見も出ていた。

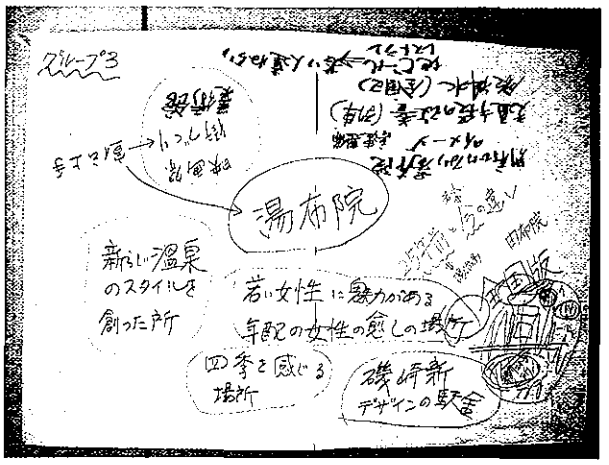
以下、各グループで作成した模造紙を掲載する。



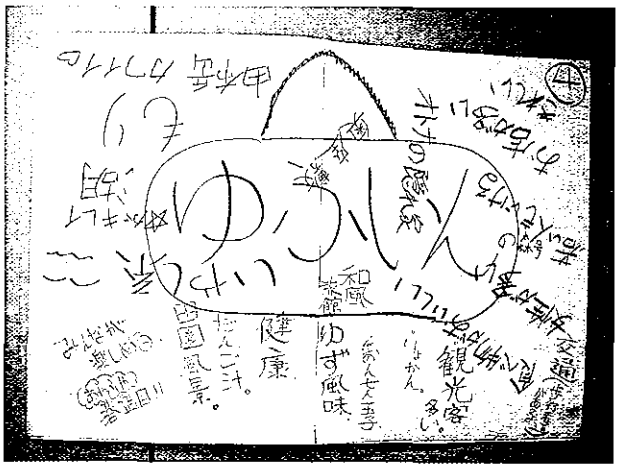
1班



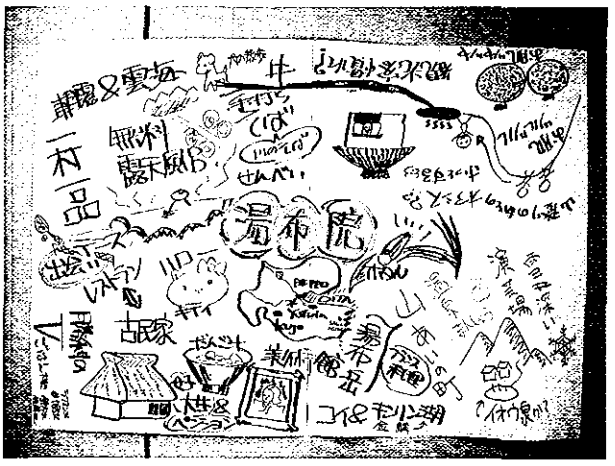
2班


湯布院
新しい温泉のスタイルを創った所
若い女性に魅力がある
年配の女性の癒しの場所
四季を感じる場所
磯崎新デザインの駅舎

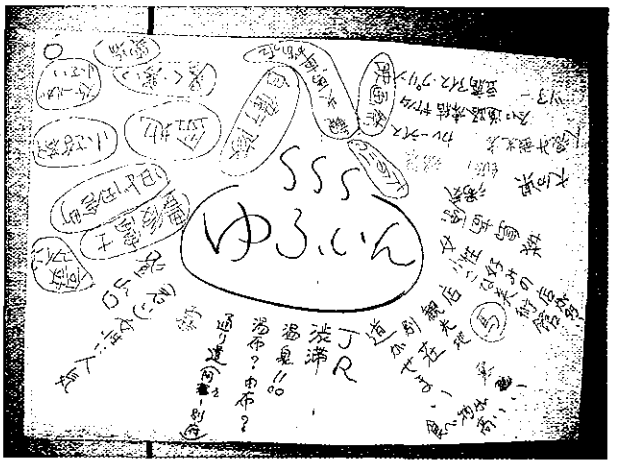
3班


ゆふいん
観光客多い。
ゆず風味。
健康
おんこ汁。
自然風景。

4班


湯布院
無料
駐車場
古民家
山の町

5班


ゆふいん
JR
温泉!!
湯布?由布?

6班

福岡からアクセスよい
湯布院
高速道路
ドイツの保養地のイメージした町づくり
おいしい!
おつまみ屋さんが多い
あんぱん
ゆずごしょう
手焼きせんべい
ぼたもち屋さん

7班

３．オリエンテーション（湯布院）

２日目は湯布院に場所を移してプログラムを実施した。はじめに、湯布院町の概要について由布院観光総合事務所の米田誠司氏から、また、平成14年度に実施された湯布院町交通実験について、実施に至った経緯、当日の様子、その後の取り組みなどを湯布院町総合政策局の溝口隆信氏から説明していただいた。参加者は、湯布院の様子やインタビューのポイントとなる交通実験についての情報を得ることができた。（詳細は「Ｖ　参考資料５」を参照）

インタビューは、各々の属するグループを離れて別にインタビューグループをつくり、そのグループ毎で行った。これは、限られた時間の中でグループのメンバーが、様々なインフォーマントの話を聞くためであり、最終的に、各人がインタビューした内容をグループに持ち帰り、共有することを目的とした。

インタビューに備え、グループ毎にインフォーマントへの共通質問事項を確認した。質問内容は、主に交通実験への関わり方や関わった動機、現在の地域との関わり方、湯布院の将来像、まちづくりに対する考え方などであった。

4. フィールド調査

（1）インタビュー

平成 14 年度の交通実験に関わった方々などにインフォーマントになっていただき、交通実験に対する考え方を切り口に、「まちづくり」にどのように関わり、どのように考え、何を望んでいるのかなどを伺った。

ご協力いただいたインフォーマントの方々： 木工業、ピアノ講師、旅館業/青年部長、旅館/飲食業、温泉観光協会長、保健師、旅館業/ゆふいん FAMILY 主催、花卉農家、温湯地区自治会長、町議会議員（計 10 名）

以下、各グループの共通質問事項に沿って、インタビュー内容の一部を抜粋して記載する。

① 交通実験について

・ボランティアや視察の人数が多かったのは、ネットワークができていたからではないか。交通実験を体験した人の感想は「(由布岳を眺めながら等) ゆっくり歩けた」「のびのびできた」など。住民では、店の前までバスが入っていた店舗の住民からは「客が減った」、全体的には、渋滞の中を歩くのよりは良いという意見。行政は国の法律の範囲内でしか動けないので「努力はするが･･･」とのことであるが、一方通行には根強い反発もある。

・行楽シーズンには湯布院駅前から交通渋滞が続き、観光業者の協会員が駅前の交通整理をしてもたちうちできないということから始まりまった。私は、交通実験の事務局をし、その交通実験は、観光業界から行政に依頼があり観光課の人が対応し実施した。交通実験をした効果としては、湯布院の住民が交通渋滞や観光路と生活路などの交通に対する意識が

高まったことである。

・当日は仕事のため参加できなかった。交通実験に対しては関わる人、関わらない人、どちらもいて当然。参加を善、不参加を悪とせず、それぞれの考えを尊重できる、それが湯布院の良さだと思う。これをイベントとして終わらせるのではなく、地元のタクシー運転手に聞いて裏道を作るなどもっと住民が自分たちで考えることの方が重要だと思う。

・初日にボランティアとして参加した。参加動機は友人に誘われたから。当日は、アンケートの聞き取りをした。普段出会えない人と出会えた事が楽しかった。

② 湯布院の観光について

・非日常の体験でなく、日常の中にある何かに気が付く体験、はっとする自分に会えるのが湯布院の観光だと思う。人気が出ることで、自分たちが偉くなったと勘違いしてはいけない。足元を見つめること、原点に返ることが必要。外の人が来ることで教えられることは多い。外の風が吹くこと、いろんなものに触れることはいいことである。自分も人との出会いの中で変わり続けている。

・知らない間に観光地になっていった。近隣の住民が次々と家を売って引越しをしていった。

・ホテルや旅館が増えるとそこで働く人も増える。実際、土・日に働くお母さんもいるし、最近、児童館や保育所が増えている。これは都会と同じ現象だと思う。

・湯布院は、観光業である旅館に活発な動きがあり活動している。農村の人達は、もともと湯布院は農業を中心とした町であり田園風景を大切にしたいと思っており、観光業が活発になって景観が悪くなることを好んでいないという状況がある。湯布院には、温泉以外の観光資源、例えばお城のような古い建物がある訳ではない。けれども沢山の観光客が来る。それは湯布院の自然や田園風景という癒しの空間を求めてくるということである。一方、湯布院の行政はどちらかと言うと、農業・林業に対し町を挙げて保護し、観光としてのイベント事業には一部の補助金しか入らない。観光業側からは、「行政は農家の保護ばかりして」との声が上がっている。

③ 湯布院の町への今後の関わり方、将来像

・受入れ側が、せめて一泊してゆっくりのんびりできるような滞在型の観光や何か湯布院の特徴を活かしたもの、自慢できるものなどを自分たちの手で明確にしながら顔の見える範囲で活動や事業に取り組みたい。

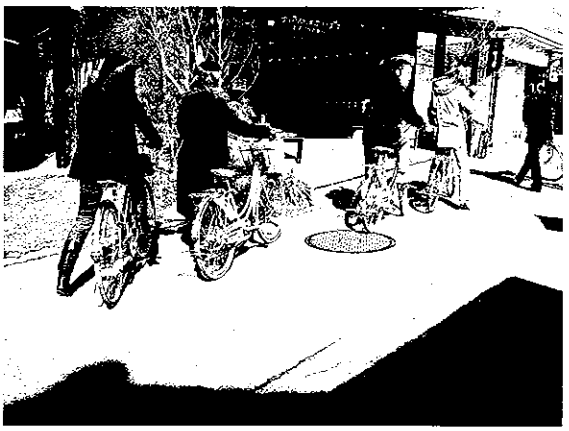
・住んでいる人が楽しく暮らしているところがいい観光地である。内からのものをまってい

てもダメなので識者やマスコミなどの外からの力をもらって、町民を刺激したい。住人のパワーこそが必要である。観光客の心理もおさえておきたい。湯布院全体の魅力は、旅館が担っている。町外からの移入は、「湯布院に本当に住みたいのか」が大切である。

・自分たちが子どもの頃に感じることが出来た自然を残してほしい。但し、町内に高校がないなど教育面では不利な部分もあるし、子どもたちが外に出たがる理由も理解できる。けれど、いつか戻ってきたいと思える町であることは大切だと思う。そのためにも、大人が楽しいと思えることを子どもに見せていくことが大切だと思う。

（2）自由インタビュー・散策

インタビュー終了後、湯布院町内を自由に歩き、出会った観光客や道行く人々にインタビューを行った。多くの人にインタビューを試みるグループ、町にある様々なものに気付くグループ、交通実験に関連付けて町をみて回るグループなど各グループそれぞれの調査・散策を行った。



５．講義「参加型開発再考」

講師：（財）日本国際交流センター
チーフ・プログラムオフィサー　毛受　敏浩氏

この講義では、理論的な面から参加型開発についての理解を深めることを目的に、毛受しから話を伺った。

講演内容：

今回の合同ワークショップは、フィールドに飛び出す形式であり、参加型開発について考えるという目的に即していると言える。

ＮＧＯの活動は、緊急支援型・アドボカシー型・社会開発型と分けることが出来、様々な活動を展開している。その中には、政府の行う開発協力（ＯＤＡ）の活動をチェックする役割なども含まれている。

国際協力に携わる人（ＮＧＯ、ＯＤＡに関わらず）は、発展途上国の問題に高い関心を持っているが、国際協力と国内の問題とは関係ないという前提で関わる人が多い。大学でも国際関係を学ぶ人は多く、知識を高めているが、国内の問題については知らないことが多い。

しかし、国際協力と国内の問題を切り離して考えるべきではない。日本という国の発展、国内の問題に取り組んだ対処法などが途上国の問題解決や開発に活かしていけるという考え方を持つこと，つまり湯布院の交通実験が途上国の開発にどう関わってくるのかという視点が重要なのである。

湯布院の交通実験などの取り組みについて考えると、住民が地域に想いを持っており結束しているという前提あってのものと言える。つまり、湯布院住民という一体感があり、ソーシャルキャピタルが高い地域であったからこそ取り組むことができたのではないかと思う。この場合、社会的結束力が強すぎると閉鎖的または排他的な傾向、場合によっては「なあなあの関係」になってしまうということもあり得ることを頭に置く必要がある。

それに対して、途上国と言われる国々での展開を考える時、貧富の格差や多民族、多文化、対立という状況が多く、自分のことで精一杯、つまりソーシャルキャピタルが薄いと言える。

例えば、タイ東北部での共同溜池を作るプロジェクトの場合、共同溜池作りで失敗し、個人池作りに変更したら成功したことからも、貧困の中での開発計画の性格が見えてくる。そしてこのような状況で、ソーシャルキャピタルを高めることはかなり難しいと言える。

参加型開発には、リーダーの育成と、現地の住民に直接利益（お金や物資）を与えないことが大切である。小規模な範囲で時間をかけて結果を出していく。

また、どこでも住民参加型開発が可能だというわけではない。例えば、スラムと言われる地域では、住民のほとんどが「できれば早く地域から出ていきたい」という意識を持っている。そのため、その地域をよくしていこうという活動への参加を促すのは難しい。

国際協力を地域社会が主導となって展開していくことの特徴は、途上国の地域社会と対等・相互的な立場を原則としているので、そこには必ず「交流」ということが生まれる。そ

れによって双方の市民のエンパワーメントにつながると考えられる。
つまり、地域住民同士の間で顔の見える関係が構築され、お互いのソーシャルキャピタルを高めることにもなり，プロジェクト期間で終わらない継続的な協力が行われるということにつながるのである。

６.講義「湯布院について」

講師：「亀の井別荘」主人
中谷　健太郎氏

昨年 11 月、ＮＨＫの番組「プロジェクトＸ」で湯布院を舞台にした「湯布院　癒しの里の百年戦争」が放映された。無名の農村を日本中の人々が憧れる保養地に育て上げた人々の伝説の物語として、まちづくりのリーダーたちとその取り組みが紹介された。

その中心人物でもある中谷氏に、番組では見られなかった側面から、湯布院についてのお話を伺った。

講演内容：

プロジェクトＸ

番組を見た人からの「おめでとう」の声に「実際そんなに上手くいっていないんだけど･･･」という思いがある。しかし、世間で「いいところ」と評判の町が、こんなに冷たい氷を抱いていた時代があるということを紹介できたことは、結果的に良かったと思う。

小さい範囲でしっかり生きていれば、外と手を結ぶことが出来る

山の中の村は排他的と思われがちだが、山の中では塩や鉄は手に入らない。外から塩や鉄、流行歌など色々なものを持ってきて成り立ってきた。しかし、「顔が見える範囲」の単位は広げない方がよい。

対立的信頼関係

昭和 46 年、私費でドイツの観光地･温泉保養地の視察を行った。その時の同志、溝口薫平氏（「玉の湯」会長）、志手康二氏（「夢想園」･故人）とは、何一つ共通点はないが、ドイツに 50 日でも一緒に行けるというような信頼関係がある。溝口氏との関係を象徴するのは、「じっくり説明しても、彼は『分からん』、一晩かかって説明すると彼はようやく『分かった』といって帰るのだが、翌朝になると『やっぱりよう分からん』と。でも、そのうち『けんちゃんがそこまで真剣に言うなら、やってみようじゃねぇか』とみんなをまとめてくれる。」というエピソードである。

話し合いは「信頼」を形成するために設けられるもので、それは差や違いを前提としている。いわば「対立的信頼関係」である。変なヤツと折り合いをつけてきたのが湯布院である。

小林華弥子氏の町議員当選

（小林華弥子氏：湯布院町議会議員。数年前よりコンサルタントとして湯布院のまちづくりに関わる。平成 16 年１月の町議選で初出馬、当選。）

「集落」は私たちの考えの根幹を成している。町議員とは、元来、地区から代表を選び、各地区を背負って出て行くものである。そこには自分たちの村のことは自分たちで決まればいいという考えがある。それを考えると、今回の町議選で集落を持たない（湯布院出身でない）小林氏が当選したことの意味、湯布院には小林氏を応援する人がたくさんいると言うことの意味は大きい。

また、今回30代から40代の新人が9名も当選したが、このことの意味も大きい。

町民代表とは何か？

最終的には議会である。議会制民主主義でなくてはならない。まちづくり構想 100 人委員会（民意を吸上げて、国より半歩進んだまちづくりの条例）へのオブザーバー参加をしており、これを議会へ反映させている。

この町の将来像―「生活圏」と「生存圏」

小さな地域（生活圏）の強化を考えたい。これは、顔の見えるエリアのということである。

外から湯布院町へ移り住む人が増加している。これは、婿取り婚に例えられる。嫁の暮らしの特徴を浮き立たせれば、それだけ他との比較が出来る。嫁の仕来たり（村の仕来たり）を受入れられるものは歓迎したい。

クアオルト（Ｋｕｒｏｒｔ、滞在型温泉保養地）構想

クアオルトとは、単なる観光地ではなく、温泉、文化、自然などの住民の生活環境を整えた上で、湯布院なら湯布院なりの保養温泉地を形成していくものである。昭和46年のバーデン・バイラー（ドイツ）の視察以来、推進してきた構想である。

滞在が長くなれば客と住民が近くなる。そこでは過剰なサービス、ご馳走は不要であり、本当に必要なものしか購入しない。一過性の客とは文化が違う。

人は何かを媒体にして出会う、湯布院はその媒体が温泉なのである。

7. グループワーク

フィールド調査や講義で新たな視点をえた参加者は、グループワークの作業を開始した。ポストイットや模造紙を使い、インタビュー内容を表形式にまとめたり、地図を作成したりして、話し合いを行った。

町に住む様々な人々の考えにふれたことで生じた湯布院に対する参加者の認識の変化、湯布院のまちづくりや、まちづくりにおける住民の参加の重要性、そもそも住民参加のまちづくりとはいかなるものかなどについて議論を行った。

グループによっては深夜まで話し合いが続いた様子が伺えた。

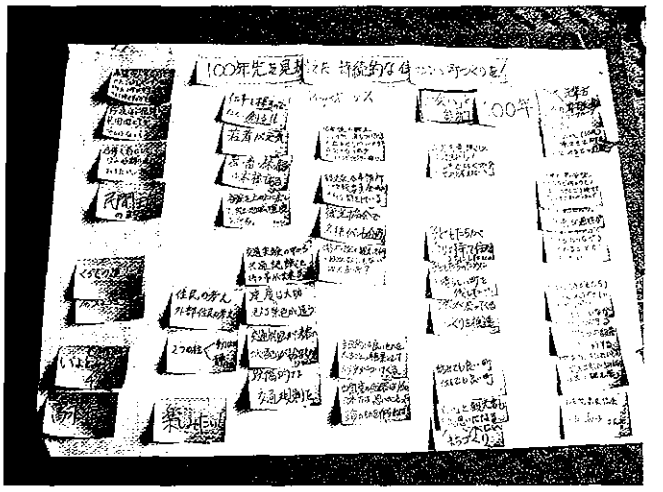
8．グループ発表

テーマ・発表形態は自由
グループ発表時間：発表 10 分・質疑応答 5 分

以下、発表順に掲載

6 班
メンバー：原田君子・川原規之・大木克孝・井浦真須巳・天池麻由美
テ ー マ：100 年先を見据えた持続可能な住みやすいまちづくりを目指して
「まちづくりに人あり・歴史あり」
発表形態：劇
内　　容：
インタビュー内容を再現することで、湯布院町の過去・現在・未来を町に住む人々の想いにあわせての発表を行った。
[過去]中谷健太郎氏・溝口薫平氏らによるドイツへの視察からはじまった「湯布院のまちづくり」様々な人々と関わり、時には対立しながらも「信頼関係」を築いていく過程
[現在]「先輩から受け継がれたまちづくり」に関わる若い人々にインタビューを行い、まちづくりへの熱い想いを聞く。また、次世代を担う子どもたちにもインタビューを行い、口をそろえて「大きくなっても湯布院に住みたい」という返事に湯布院の未来像を考える
[未来]「10 年後の湯布院」についてのインタビュー内容を発表し、「100 年をみすえたまちづくり」とは「過去から現在、そして未来へとつながる歴史があり、先輩から後輩へと人を通して受け継がれるもの」であるとし「出会い」「参加」を繰り返しながら行われた。

グループ発表の成果物



5班

メンバー：佐藤剛史・丸野里美・ラフマン・モクレスール・鈴木智博

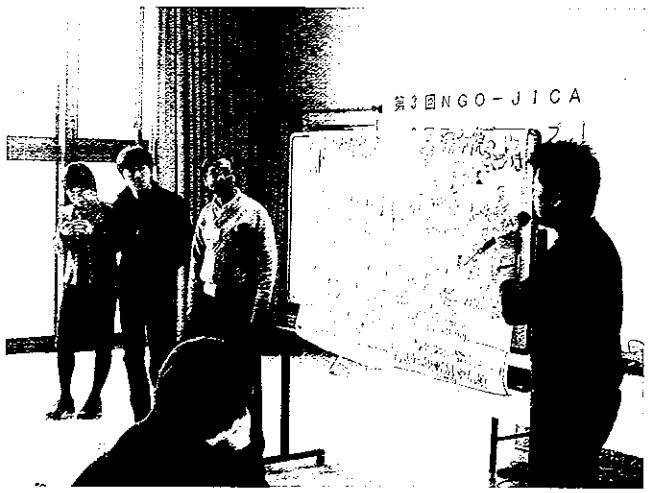
テ　ー　マ：湯布院のこころいき

発表形態：模造紙を使用したプレゼンテーション

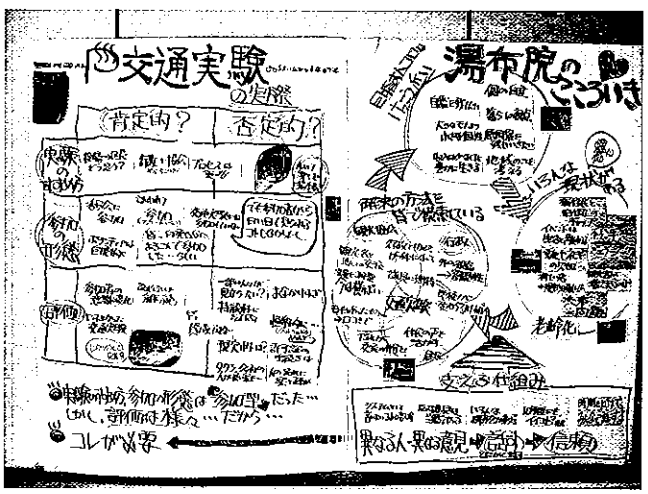
内　　容：

ワークショップという短時間でみた湯布院は、表面的なものだと思うが、感じたこと、考えたことをまとめてみた。インタビュー内容から「交通実験」に対して「実験のすすめ方・参加形態・評価」を「肯定的・否定的」な見方で分類。そこから、様々な意見があるのは当然だが、実は目指す所は近いのではということが見えてきた。新住民と従来の住民とのギャップ、イベントと生活のギャップ、渋滞問題、老齢化など様々な現状があるが、それぞれの人が湯布院の町に望むことは「地域の事を考える・ 自然を守りたい・暮らしの視点を大切に、精神的豊かさを求めたい」などであった。その方法を模索しているのも湯布院の現状である。

それでも模索に終わらず，何らかの行動が生まれているのが湯布院の特徴と言え、それを支えているのが、この町で大切にされている「異なる人の意見を聞き、話し合い、信頼すること」である。



グループ発表の成果物



7班

メンバー：重田康博・徳永まどか・井上昭子・西嶋克司・山崎潤

テ ー マ：由布岳からみた現在の湯布院

発表形態：劇と模造紙を使用したプレゼンテーション

内　　容：

湯布院を見守る由布岳をファシリテーターに、インタビュー内容を再現した。「100 年のまちづくり」を掲げ、ドイツのバーデンを視察して長期滞在型温泉地として発展してきた湯布院だが、外資本の投入により店舗数が増え、外部からの流入が多くなった。現状維持を望む声もあり、これからは大きな変化を望まず、観光業とうまく折り合いをつけて生活をしていきたいという声もあった。

そこで、提案できるプロジェクト案としては、観光理念の明文化・法則化を行い、湯布院のまちづくりの方向性を話しあってはどうだろうか。ア

グリツーリズムやスローフードの提唱で、湯布院の良さを活かした観光ができ、農業との両立も図る事ができるのではないだろうか。都市と農村がうまく交流できる町になることを目指すのも一案だと思う。また、様々なステークホルダーが利害調達をし、今以上に住民中心のまちづくりを行うためのフォーラムを組織したらどうか？

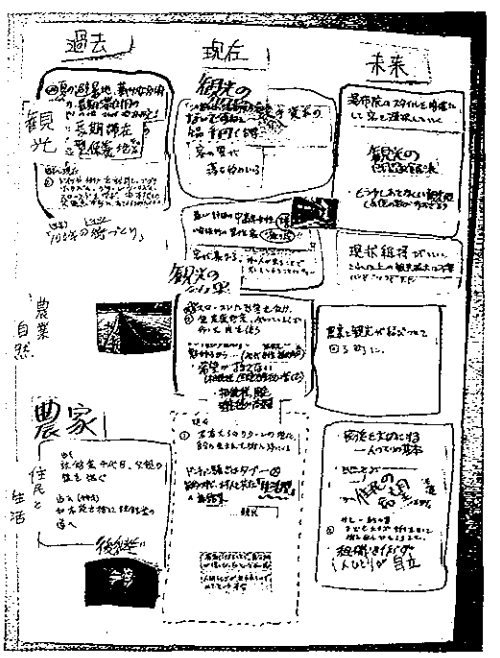
質疑応答：

Q.アグリツーリズムやスローフードといった言葉が流行する以前から湯布院はそれを実践しており、さらに超えたレベルの事をやっているのではないだろうか。

A.流行の言葉を使えばよいと言うのではなく、それを明確なコンセプトとして打ち出すことがさらに必要だと思う。

ーＪＩＣＡ
ショップ

グループ発表の成果物



4班

メンバー：西川芳昭・辻亜由美・石橋龍太・松崎美和子・松久逸平

テ ー マ： 町をよりよくするための取り組み（デメリットの克服の仕方）

発表形態： 模造紙を使用したプレゼンテーション

内　　容：

地方の課題、その原因と障害、解決方法という三つの視点で湯布院の現状を分析した。

観光客は湯布院の癒しの空間、自然、田園風景を求めて足を運ぶ。しかし、湯布院の知名度アップに伴い、生活道路と観光道路が重なることによる交通混雑、外部資本の参入による景観の悪化、情報交換の未調整、世代交代などの問題も生じている。しかし、湯布院に存在する「対立的信頼関係」を活かすことで、農業、観光業、行政、住民、観光客（湯布院ファンクラブ）といった多様な立場の人を巻き込んで、一緒にまちづくりをしていくことが可能である。それは、様々な立場の人が存在する湯布院であるが、町を良くしたいという共通の方向性があるからである。

まちづくりでは、道路整備、湯布院産の農作物のインターネットを利用した情報提供、高校など施設の設立、店舗調査など様々な立場の利害を調整しながら進める必要がある。

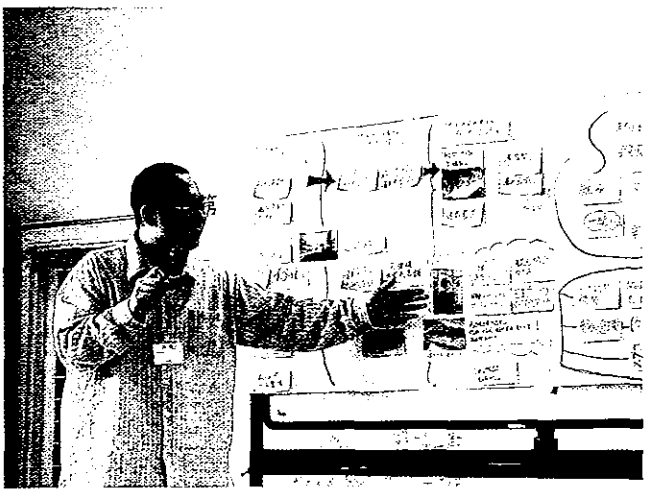
質疑応答：

Q.一度湯布院を出ながらも、Uターンした人もいる。高校をつくるという提案をした理由は何か。

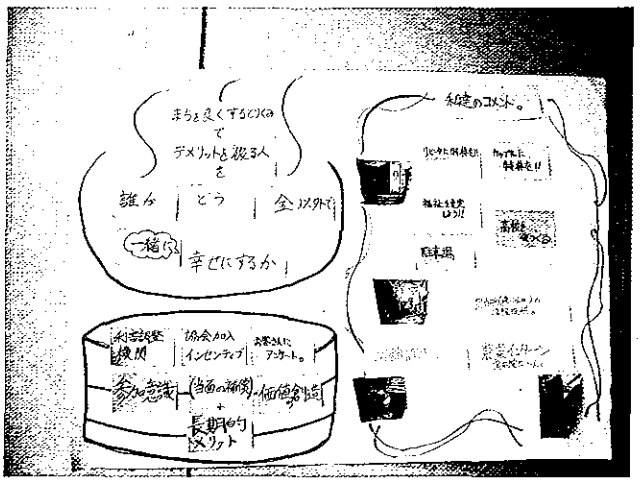
A.高校を設立することで、若者の流出を防ぐことができる。学校や福祉を充実させれば、外部者の流入も期待でき、また雇用が生まれる。

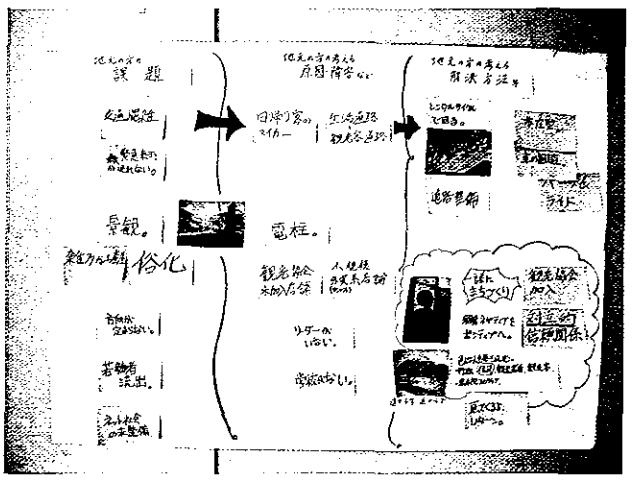
会場からのコメント：

ネット社会の未整備については、日本社会全体の課題を解決する際にも重要な項目である。



グループ発表の成果物





2班

メンバー：椿原恵・田崎弘・川崎章江・谷川政敏・中谷康子

テ　ー　マ：湯布院からの贈り物

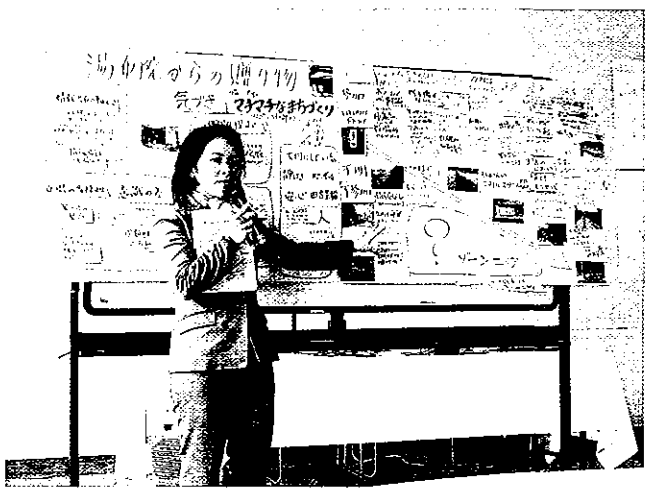
発表形態：模造紙を使用したプレゼンテーション

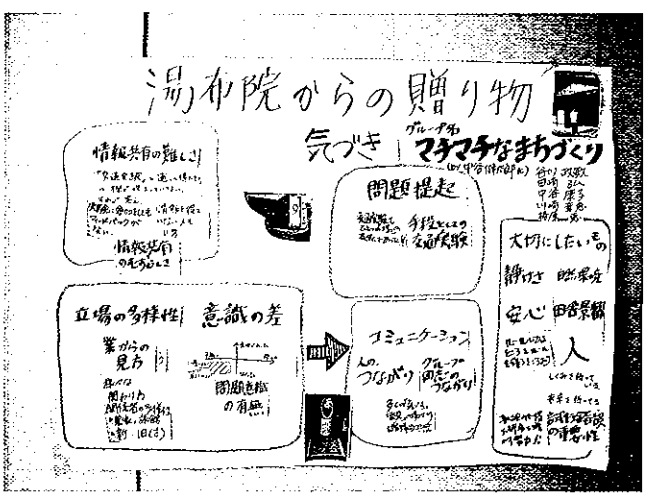
内　　容：

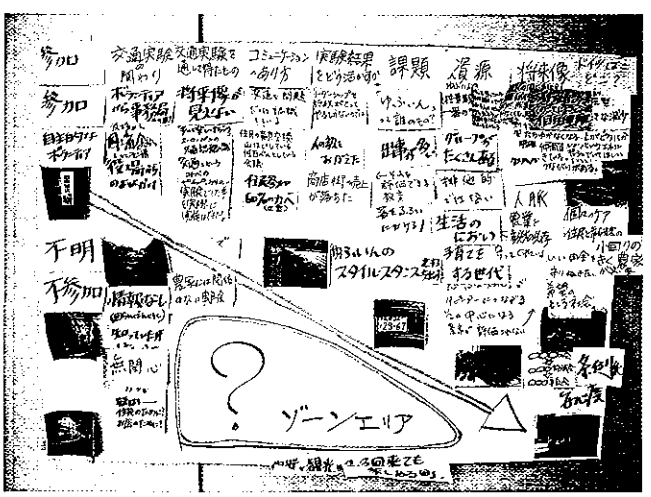
「交通実験にどう関わったか」という切り口によりインタビューを実施し、そのインタビューを通して分かった事と、ここでの発見を参加型開発に活かせる「気づき」について発表をした。

インタビューでは、時間的制約もあり、交通実験に参加しなかった方々から、十分なコメントを得る事ができなかった。しかし、このインタビューで分かったことは、参加をした人には交通実験に対しての問題意識の高まりがあったこと、参加した人と参加しなかった人との間は意識の差が発生していることである。この差をなくすためには、情報提供が必要であると考えられる。その他にも、湯布院には、大切にしたい静けさや自然景観、人や新しいものを柔軟に受入れる仕組みがあることも分かった。

今回のインタビューで、実験に参加してもフィードバックがなく、情報を持っていない人もいたことから「情報共有の難しさ」を理解した。また、農家や旅館など多様な方々が関係することから「立場の多様性」と「意識の差」があり、コミュニケーションの必要性を認識した。交通実験も問題提起の手段であり、このような試行錯誤を繰り返して「気づき」を得ることの必要性についても認識した。これら「気づき」は、参加型開発を行う上で活かせる事柄であり、今回のワークショップだけで終わらせるのではなく、今後の活動につなげていくことが望ましい。







グループ発表の成果物

3班

メンバー：内田義弘・嶋村有美子・木村理恵・瀧本昌平・一瀬洸

テ　ー　マ：　まちづくり

発表形態：模造紙を使用したプレゼンテーション

内　　容：

インタビュー内容から、湯布院の現状認識を行い、インフォーマントを「交通実験に関わった人」「関わらなかった人」で分類した、それぞれの湯布院の町に対する考えなどを分析した結果、住民の多様性が見えてきた。

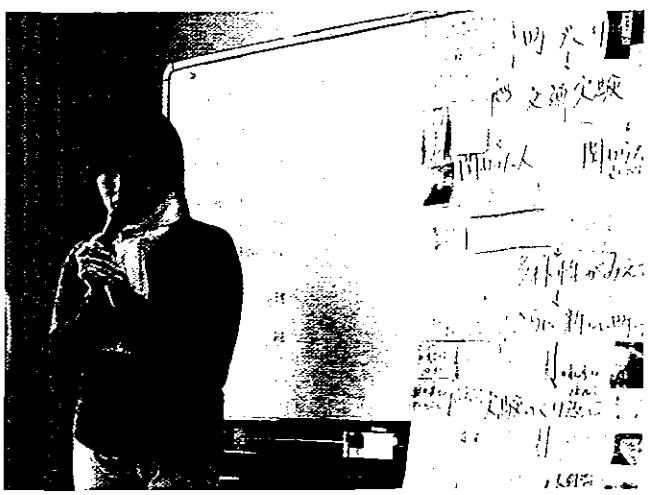
住人は、お互いの存在を認めつつ、さらにコミュニケーションをもつ必要性を感じている。まちづくりにおけるコミュニケーションの場を創造していくことが大切であり、今まで関わらなかった人が関わりたくなる方法を模索していく事を繰り返すことがまちづくりであり、そのひとつが交通

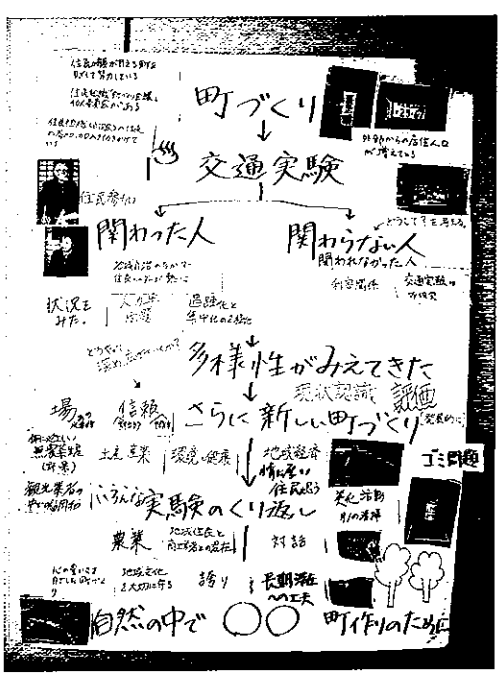
実験だったのではないだろうか。湯布院のまちづくりの魅力はその模索しつづける姿勢をもった住民の意識だと考える。

質疑応答：

Q.交通実験のアンケート結果でアンケート対象が湯の坪地区の住民だけだった事に対して、「もっと広い範囲を対象にするとよいのでは」という意見が出されていたが、これは関係した人々という意味では、湯の坪地区だけでよかったのではないだろうか。

A.町を湯布院町全体と考えると、まちづくりにおいては一定地域だけではなく、町全体を対象にしたほうが、また別の方法で交通実験を行ったり、新たな方向でまちづくりを行ったりできるのではないだろうか。





グループ発表の成果物

1班

メンバー：藤井大輔：北村祐子・吉野あかね・工藤憲孝・小林恵子

テ　ー　マ：ネットワーク

「湯布院インタビューマップ作成とネットワークについての分析」

発表形態：模造紙を使用したプレゼンテーション

内　　容：

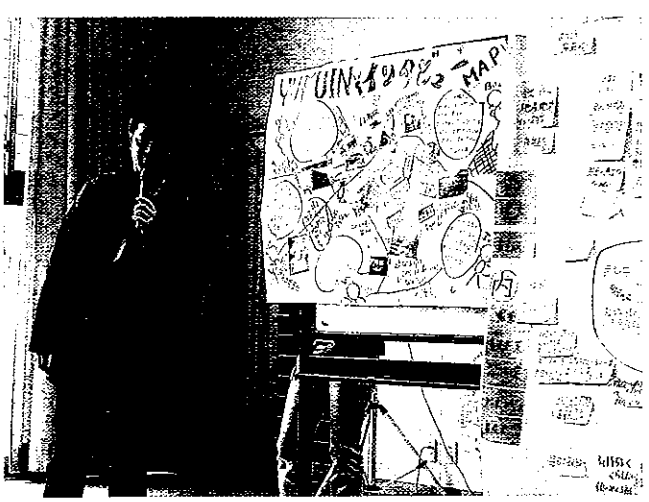
インタビュー・散策から得た情報を元に湯布院の現状を分析。自然もあるが、1000 円ショップやお土産屋さんなどのお店もある。様々な車が走っていて、住民・観光客などが渋滞をぬって歩いている。その中には、自然の風景を大切に静かな生活をしたいと願う人・自然を守っている人もいる。

湯布院は、町の柱である「農業・林業・畜産・観光」で生活をしている住民が共存をしていかなければならない。「湯布院が好きである」ということで共通している人々がそれぞれの立場で出来る事を考えるには「ネットワーク」が大切である。湯布院のネットワークは、様々な住民が参加しており、また外部の人間（有識者・マスコミなど含む）を受け入れている点がおもしろい。

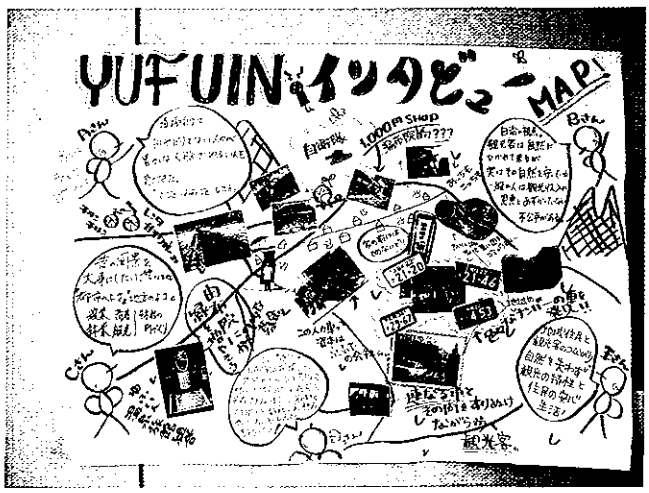
質疑応答：

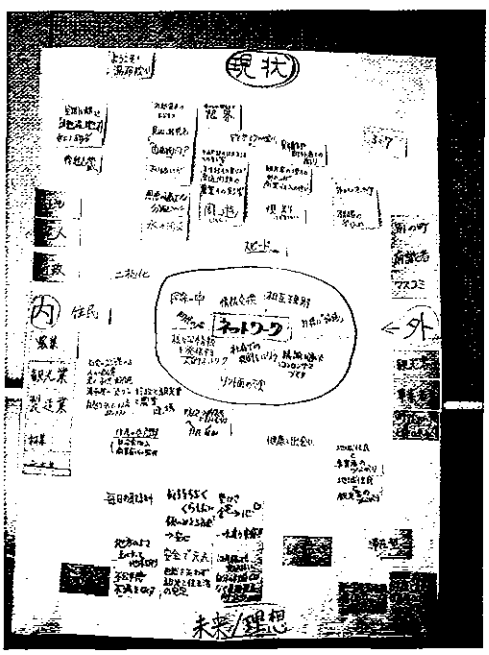
Q.発表の中で、湯布院の特徴は観光業で、その売りは「自然」だが、町の中にはその自然を守っている人々への認識が薄いのではとあった。しかし、観光業からの利益は町民に分配されているのではないだろうか。

A.日本社会における分配のシステムは機能しているだろうが、自然を守る人々への精神的や存在に対する敬意も必要なのではないだろうか。



グループ発表の成果物


YUFUIN イインタビュー MAP!
Aさん
Bさん
Cさん
1000m Shop
観光客


現状
ネットワーク
内
外
未来/理想

Ⅲ．ＪＩＣＡ草の根事業説明会

Ⅲ　ＪＩＣＡ草の根事業説明会

平成14年度より、ＪＩＣＡではＮＧＯや自治体、大学等がこれまでに培ってきた経験や技術を活かした途上国への協力活動を支援し、共同で実施する事業を実施して来た。本ワークショップで培った能力を、今後各団体の国際協力活動に活かす一つのツールとして本事業を活用いただくため、事業説明及び事例紹介を実施した。

１．事業説明

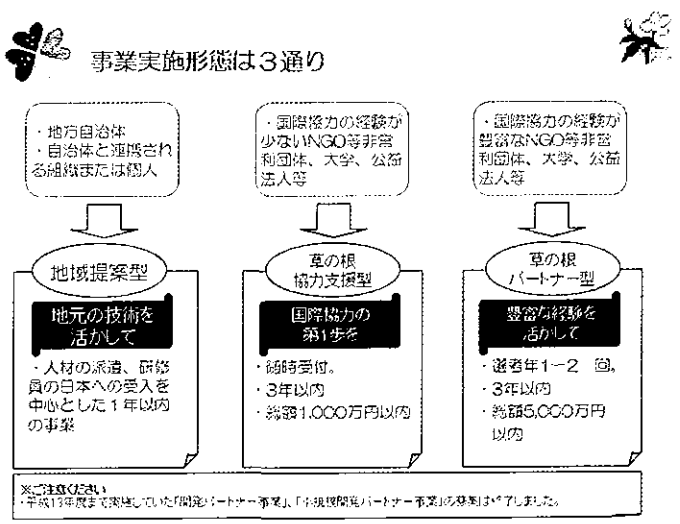
担当：ＪＩＣＡ九州業務課　坂部英孝職員

ＪＩＣＡ九州作成のパワーポイントを使用し説明。主な説明点は以下の三点である。

（１）草の根事業３形式の概要説明

（２）草の根事業実施条件、各形式への応募条件

（３）提案から事業実施までの流れ



（１）草の根事業３形式の概要説明

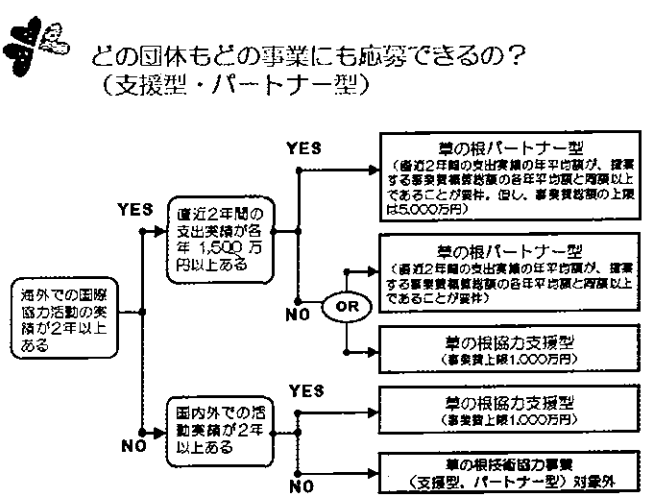
本事業は応募団体の種別、経験により大きく３つの形式に分かれる。

（ア）地域提案型：「地方自治体」または「自治体と連携した組織または個人」が提案団体となる。

（イ）草の根協力支援型：国際協力の経験が少ないＮＧＯ等非営利団体、大学、公益法人等が対象。

（ウ）草の根パートナー型：国際協力の経験が豊富なＮＧＯ等非営利団体、大学、公益法人等が対象。

ここでの注意点は、①地域提案型は自治体と連携する形をとることで、ＮＧＯも提案が可能、②国際協力の経験（海外・国内での活動経験、過去２年間の支出実績）により区分があり、国際協力の経験がない団体でも提案が可能であるという点である。



（２）草の根事業実施条件、各形式への応募条件

（ア）実施対象国

草の根技術協力事業（３形式とも）はＪＩＣＡ事務所・駐在員事務所が存在する国を対象として実施される。

＜草の根技術協力事業実施対象国（平成 15 年 10 月 1 日現在）＞

アジア地域　19 カ国 インド、インドネシア、ベトナム、ウズベキスタン、カンボジア、スリランカ、タイ、中華人民共和国、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、モンゴル、ラオス、キルギス、東ティモール、ブータン 中近東地域　9カ国 アフガニスタン、エジプト、サウジアラビア、ヨルダン、シリア、チュニジア、トルコ、パレスチナ、モロッコ アフリカ地域　15 カ国 エチオピア、ガーナ、ケニア、ザンビア、ジンバブエ、セネガル、コートジボワール、タンザニア、ナイジェリア、マダガスカル、マラウイ、南アフリカ、モザンビーク、ニジェール、ボツワナ 中南米地域　16 カ国 アルゼンチン、コロンビア、チリ、ドミニカ共和国、パナマ、パラグアイ、ブラジル、ペルー、ボリビア、ホンジュラス、メキシコ、エルサルバドル、グアテマラ、コスタリカ、ジャマイカ、ニカラグア 大洋州地域　8カ国 サモア、パプアニューギニア、フィジー、バヌアツ、ソロモン、トンガ、パラオ、ミクロネシア 東欧地域　4カ国 ハンガリー、ブルガリア、ポーランド、ルーマニア

（イ）事業規模・応募時期

また応募時期については、「支援型」は随時募集であり、提案団体がＪＩＣＡ国際センターに相談に行くことから事業が始まる。特に支援型については、提案団体とＪＩＣＡの間でともに案件を形成することが重要である。

どの団体もいつでも、全ての事業に応募できるの？

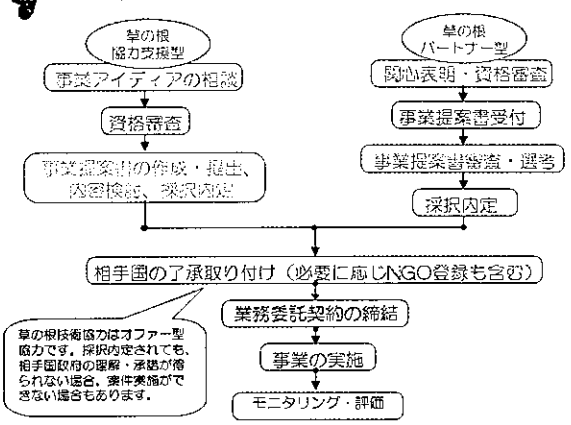
	対象団体	事業規模	応募時期
地域提案型	「地方自治体」または「地方自治体が指定する団体」	１年以内 （選考にて規模の費用対効果を精査）	年1回 （16年度実施分は15年8月に実施）
支援型	国際協力の経験が少ないNGO等非営利団体、大学、公益法人	3年以内 総事業費 1,000万円以下	随時
パートナー型	国際協力の経験が豊富なNGO等非営利団体、大学、公益法人等	3年以内 総事業費 5,000万円以下	随時 （ただし選考は年2回）

（３）提案から事業実施までの流れ

は基本的に提案団体からの応募・相談から全てが始まる。特に案件形成の段階は大変重要な位置づけにある。

一方、案件が採択された場合、実施にはあくまでも相手国政府の了承取り付けが前提となる。議事録署名、実施国でのＮＧＯ登録他、必要な手続きがあり、これを了しないと案件が実施できない可能性がある。

応募したらすぐ実施できるの？



（4）最後に

本事業は各地域を担当するＪＩＣＡ国際センターへの相談から事業が始まる。また提案団体とＪＩＣＡで共に案件を形成していく過程が大変重要であることから、事業を提案したい場合、まずはＪＩＣＡの国際センターに相談に来てほしい旨説明。

２.事例紹介

事業紹介に続き、本事業を実際に実施した２団体から、プロジェクトの内容、国内・現地のＪＩＣＡとの連携などについてお話いただいた。

（1）支援型「鉤虫対策プロジェクト」

発表者：じゃっど　代表　帖佐理子氏
対象国：ラオス国

実施期間：2002 年７月～2003 年６月（１ヵ年）

１）草の根技術協力に応募したきっかけ

本プロジェクトは、鉤虫という十二指腸に寄生して栄養失調や貧血を引き起こす寄生虫の感染を減らすことを目的に、現在の草の根技術協力事業（支援型）の前身である小規模開発パートナー事業としてラオスのビエンチャン郡で実施したものである。

1992 年にラオスの医師たちと協同で団体を設立してから、持続的かつ責任をもって実施できる金額として年間 200～300 万円の規模で学校を対象にプロジェクトを実施してきたが、効果的な感染対策には国レベルでの関与も必要と考え、設立 10 年目に予算規模の大きい草の根事業に挑戦することとした。

２）プロジェクト概要

鉤虫は、感染者の便を裸足で踏むことによって感染する。つまり、靴を履く、排泄はトイレで行うなどの対策を行えば感染を予防できる。そこで、学校に対して衛生教育・寄生虫検査（検便）・トイレ設置を行い、また同時に検査技術向上のため、ラオスで唯一、検査技師を養成している機関に検体を持ち込み検査技師養成のトレーニングを行った。

衛生教育：教員を対象にワークショップを開き、衛生教育ができる教員を育成することで、学童への知識の普及とそれによる感染率の低下を目指した。

寄生虫検査：感染している場合、確実に薬を飲むようその場で駆虫剤を飲ませた。

トイレの設置：ラオスに赴任していたシニアボランティア（検査技師）や専門家（水道設備）が協力をしてくれた。

3）メリット・デメリット

・ ＪＩＣＡ事業という肩書きがつくことで、相手国政府の行政機関に入っていきやすい反面、ＪＩＣＡと同様に見られ、予算がたくさんあると誤解される。
・ 活動内容、経費の割り振りなどについては融通性が高い。
・ 契約締結までの準備費用は自分たちの予算から負担する必要がある。
・ 国によってはＮＧＯ登録などが必要である。

（２）パートナー型「持続可能なマルチ稲作計画」

発表者：地球緑化の会　木村浩純氏
対象国：タンザニア国

実施期間：2001 年 10 月～2004 年９月（３ヵ年）

地球緑化の会が取り上げられた番組「素敵な宇宙船地球号」のビデオを見ながら、事業紹介を行った。

1）クワとカマで米作り

プロジェクト地で参加する世帯を募り、灌漑を前提とせず天水で栽培する、機械で耕さないなど、経費の負担が少ない農法をタンザニアに紹介している。その際、プロジェクト地域での乾燥を克服するため、稲わらによるマルチ農法（耕作地の表面を覆い水分の蒸発を防ぎながら栽培する農法）も取り入れている。

地球緑化の会の栽培法による田の収量は、現地の従来農法による田のものの約３倍となり、マルチ農法の効果が認められた。

2）2003 年の異常気象とプロジェクトへの影響

2003 年は 30 年ぶりの干ばつに見舞われた。そのため、プロジェクトに参加している世帯の稲も枯れていってしまった。家族が食べる分の収量だけでも確保するため、例外的に機械を用いた灌漑による水田農法を実施した。その際、「何かあっても援助で助けてもらえる」という意識を持たれるのは好ましくないので、来年は実施しないことを明確に伝え、新規参加を希望する農民も受け入れないことにした。

3）マサイ族と農耕民族の話

狩猟民族であるマサイ族と農耕民族の共生の行方は？

4）地球緑化の会が目指すもの

極力機械や機械による灌漑に頼らない農法の普及。技術や知識を補い合えるような他団体との協力を行いたい。

５）昨年のＮＧＯ-ＪＩＣＡ合同ワークショップ（広報研修）の成果発表

昨年のワークショップ後、広報用にチラシを作成した。県内の国際交流・協力イベントで配布している。今回のワークショップでも配布。（チラシはＶ参考資料４を参照）

Ⅳ．ワークショップ評価

Ⅳ　ワークショップ評価

1．意見交換会

テーマ：ワークショップの経験の活かし方を考えよう！

インタビューやフィールドワークで感じたこと、今回の経験を今後の活動にどう活かすか等をグループ毎に話し合い、その結果をまとめて発表する。

（1）学び

①プログラム全体を通して

・　多様性

—色々な意見を組み込んで、共存・共生していくことの重要性。

—直接に今回の事例なり、取り組みがそのまま反映されるというものではないのかもしれない。しかし、ここで物事において様々な視点・観点・感点があることを知った。

・　世代交代

—世代別のリーダー、各層のリーダーの育成と活用の重要性。

・　役割の明確化

—見えないところで誰かが何かを担っている。それを明確化することで、各自の取り組みが見えてくる。

—個々の違いを尊重しながら、ひとつの方向性を探っていくプロセスが大切である。また、そのプロセスの中で、自分の意見を発信することを意識する。

・　ネットワーク

—様々な観点・感点を持った繋がり。ネットワークを活かす。

—意見・情報交換を通じて、共有していける所は共有すべきだが、単一化するのではない。

—ネットワークで広がる。

・　湯布院は一つの手段

・　問題意識を持つという問題提起、現状を正確に把握するプロセスの一つ一つに意識を持ち続けることの大切さ。一過性ではなく、継続した取り組みの過程から学びとっていく。

②湯布院の事例から

・自分の団体の再見

—自分が、何にどのように関わっているのかを明確にする。また、何が問題なのか、現状把握し、そこで見つけた問題にどれだけ入っていけるのかを考える。

—目的抽出：どうあるべきなのか、周りはどのように取り組んでいるのか等を知る。目標設定：どうありたいのかを明確にする。そしてそれを発信する。→共通理解

・ 積極的に参加する、意見を発信し続ける姿勢

—しっかりと自身の意志を持って、色々なものを受け入れる。

（２）準備委員会より全体の補足（西川芳昭氏）

・ 国際協力の変化—技術移転から共同体へ（パートナー）
・ 現実的に、内部資源だけでは成り立っていかない。外部者の関わりも必要である。
　ーこれはＮＧＯもＪＩＣＡも同じ。
・ 方法論や技術の研修ではなく、自分達が出向き五感で感じることから学び取る。
・ 何を共有するか？ー「知ること」より「感じる」ことの方が大切。
・ 問題意識を持ち続ける、積極的に取り組む姿勢

⇩

この研修で学び取った（完結）のではなく、ここからがスタート

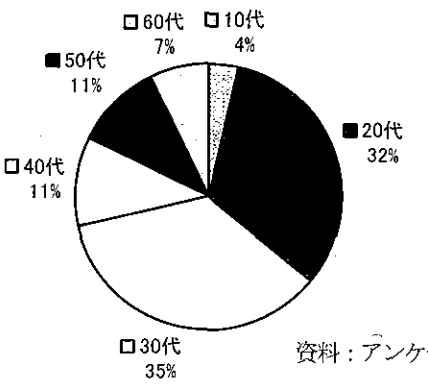
2．アンケート集計結果

［アンケート概要］

・参加者数：34
・回 収 数：28（82%）
・配布回収方法：閉会式前に参加者に配布し、事務局が回収
・アンケートの原票については添付資料を参照

［アンケートの結果］（%については小数点以下を四捨五入して表示）

（1）参加者の年齢層



資料：アンケートより作成

（2）参加者の性別

男性	17	61%
女性	10	36%
無回答	1	4%

（3）参加者の所属

NGO	18	64%
JICA	10	36%

（4）平均満足度・・・77．4%　（有効回答数27　無回答1）
※100%以上の回答は100%としてカウントしている。

（5）NGO-JICAの相互理解は深まったか（以下、複数回答可）

はい	15	54%
どちらともいえない	12	43%
いいえ	0	0%
無回答	1	4%

（6）インタビュー・フィールド調査は充分行なえたか

はい	4	14%
どちらともいえない	12	43%
いいえ	11	40%
無回答	1	4%

《理由》
はい：
・自分の中で準備したインタビュー内容は聞くことが出来ました。深く聞く事もあったでしょうが、話をしたい気持ちの方を優先していた自分があったような気がします。
・インフォーマントの調査は時間も充分ありよかった。自由インタビューは時間がなかった。
・私が技術者という事もあり、手技を基本として生きてこられた方の話を聞いて深い共感を覚えました。

・午前中のヒアリングを長引かせたので、よく話が聞けた。ただし、散策はできなかった。

どちらともいえない：

・絶対的に時間が足りない・時間不足（5）

・指定の一人に関してはじっくりできた。しかし、他の人に聞く時間はまったくなかった。（2）

・設定したインタビューは充分行なえた。町中へ出てのインタビューは実りが多かったが、時間がもう少しほしかった。

・１サンプルのインタビューしか出来なかったが、リーダーの資質が大きな力となって生活基盤と地域社会の機能が十分に果たされている事を直接身近に行なえた事は幸いであった。

・インタビュー前に「参加型」というキーワードをしっかりおさえられなかったため、インタビューの聞きこぼしが多かった。

・調査方法がよく分かっていなかったこと、またインタビューを通じて何を探しているのか自分の中で整理できておらず、いまひとつの点があった。しかし、興味深い体験でした。

・フィールド調査の手法を持たないまま、実施してしまったから。

いいえ：

・目的について理解するのに不十分であった為。

・いつも時間に追われている気分だった。

・インタビューの時間が余りにも短すぎる・時間が足りなかった。（3）

・質問の仕方が悪かったから。

・ワークグループとインタビューグループが異なっていたので設定したテーマについて深いインタビューが出来なかった。

・十分に行なえなかったが、やれる範囲で行なうことはできた。インタビューグループの間で事前に打ち合わせをする時間が欲しかった。

・インタビューの主旨、グループ内での理解が十分行なえずにしたこと。

無回答：

・時間が十分ではなかった。

・遅刻。

（7）草の根技術協力について

①関心がありますか。

はい	17	61%
どちらともいえない	4	14%
いいえ	3	11%
無回答	4	14%

②内容・仕組みについて理解が深まりましたか。

はい	18	64%
どちらともいえない	5	18%
いいえ	1	4%
無回答	4	14%

③今後、応募を考えていますか。

はい	4	14%
どちらともいえない	9	32%
いいえ	11	40%
無回答	4	14%

④　③で「いいえ」の方のみ理由をご記入下さい。

・基本的に国内の事業で固めたい。
・政策提言ＮＧＯだから
・既存のスキームの中でもう少し粘り強く、より良い方向性を探る努力を重ねていきたいと考えるから。
・まだ規模的に脆弱だから。また自分自身が未熟だから。
・特に必要がないから。
・会の趣旨に合いそうもないので。
・ＪＩＣＡ職員なので（5）

（8）ワークショップの中で特に印象に残った点や良かったと思われるプログラムについてご記入下さい

・インタビュー・フィールド調査（8）いろいろな考えがあることを知って驚いた。
・発表後の講師コメント
・中谷さんの言葉・話（3）、生活圏、生存圏
・ゆふいんの町をつくっている町の人々の生の声を聞けたことが特に良かったと思います。
・帖佐先生のコメントで①インタビューの方法やサンプリングの方法を学べると良かった。②目標が明確ではなかったとのコメントが印象的であった。特に②は今後自分がプログラムを運営する時に留意したい。
・最後の（ＮＧＯ福岡ネットワークの）吉野さんの言葉が良かった。また「出会い」というものを大切にしなければと考えさせられた。本当に実りのある研修でした。
・長い時間をかけて１つのペーパーワークを作れた、そのプロセスが良かった。
・インタビュー・フィールドは余り満足できなかったけど、まとめる時に本当に色々なことを学ばせてもらった。
・フィールドワークは短い時間でしたが、じっくり話し合うことができたと思います。
・フィールドワークの時間を工夫する必要があったかも。
・人々の出会い、感じた事、グループワーク
・グループワーク、皆の意見を聞きつつ、うまく合意形成、まとめができた。
・物事の多角性を異なる意見をもつ人同士の解決の仕方を学べた。中谷氏の話が特に充実していた。
・NGO による草の根技術協力の活動紹介
・草の根技術協力の事業説明がわかりやすかった。
・事前の打ち合わせ事項の確認とフィールド調査発表、意見交換などは良かったと思います。
・中谷氏をはじめ、湯布院のリーダー達の思いが伝わるプログラムは興味深く聞きました。
・湯布院のもつ豊かなキャパシティビルディングと人々の湯布院への熱い思い
・リーダーの熱意
・みんなで考え、問題を整理した事、フィールドがあったこと

（9）ワークショップの運営について、ご意見をお聞かせ下さい。

・余裕を持った時間設定をしてほしかった。レクチャーの時間が多かった。横のつながりがもっと出

来るようなプログラムがなかった。
・フィールドワークをもう少し絞ってやればよかったと思います。(歩く時間・話す時間など)
・各グループの発表スタイルは色々な形で良いと思うが、パフォーマンスはいらない。うけは必要ないという気がした。
・ご苦労様でした（2）
・発表している時にいそがせないでほしい。
・運営についてはパーフェクト
・メンバーが慣れた人だったから良かった。初心者だったら難しかったかもしれなかった。
・事前準備にもう少し留意したら（インタビュー方法・目的・落とし所)
・よくできました。皆さんご苦労さまでした。
・事務局スタッフが走り回って大変そうだったので、業務の一環として参加しているJICA関係者をもっと活用してもらったら良いと思います。
・「参加型」を重層低者のようにつねに認識というか、覚えておけるような仕掛けが必要だった。(司会者でも、グループリーダーでも)
・準備が周到で素晴らしかったと思います。(インタビュー先への連絡・移動など)
・司会はまとめなくてもいい。
・講義「参加型開発再考」はもう少しだった。というのも他の方々の強い個性があったので。しかし、「交流」という視点が印象的でした。
・今回の反省点をいかして、次回につなげてほしいです。
・10分・2分の報告は時間を計って、「チン」をならすということも考えていいのではないでしょうか。時間を守るというトレーニングも必要だと思います。そうでないと、公平ではないと言われる方もいると思います。
・問題を感じることはなかった。
・インフォーマントが偏っていたと思います。
・手順はよく計画されてきたと思います。でも、時間的制約が厳しかった。今後、このワークショップのフォローアップを参加者が満足する程行なう必要性を感じた。
・もう少し内容を絞ったほうがよかった。
・全てだけど、いつも時間に追われている気分だった。

（１０）
①今後もこのような研修を希望しますか？

はい	27	96%
いいえ	0	0%
内容による	1	4%

②また、どのような研修を希望しますか？
・参加型開発Ⅱといった「国際協力での参加型」とか
・もう一度「住民参加」
・同様の内容で。ただし、プログラムのバランスを
・時間的に余裕がある、もう少し深刻な問題を含んだワークショップ内容
・今後は準備段階から関わりたい。
・ポイントを絞った内容
・ＰＲＡ
・座学が多くなっても、NGOとJICAの協力事例の紹介をし、センターの近くで実施するのが望ましい。

・もう少しマイナーな町でのまちづくり
・今回みたいにどんどん体を動かすべきだと思う。
・今後もこのようなワークショップを希望します。
・ＮＧＯの能力向上
・フィールドワークを実践する為に必要な技術（インタビュー方法など）もふまえてやりたいです。
・フィールドワーク系を時間かけて。

2004.1.30～2.1

第３回 NGO-JICA 合同ワークショップ
地域で活かす、地域を活かす国際協力　―誰のための参加型開発？－
アンケート

Ｑ　１：あなたの

年齢　□１０代　□２０代　□３０代　□４０代　□５０代　□６０歳以上

性別　□男　　□女

所属　□NGO　□JICA

Ｑ2：研修内容についての感想を教えてください。（複数回答可）

①今回の研修全体の満足度は何パーセントですか？　＿＿＿＿＿％

②NGO・JICA の相互理解が深まりましたか。　□はい　□どちらともいえない　□いいえ

③インタビュー・フィールド調査は充分に行えましたか。　□はい　□どちらともいえない　□いいえ

（理由　　）

④草の根技術協力について

Ⅰ・関心がありますか。　□はい　□どちらともいえない　□いいえ

Ⅱ・内容・仕組みについて理解が深まりましたか。　□はい　□どちらともいえない　□いいえ

Ⅲ・今後、応募を考えていますか。　□はい　□どちらともいえない　□いいえ

（Ⅲで「いいえ」の方のみ理由をご記入下さい　　）

Ｑ３：ワークショップの中で特に印象に残った点や良かったと思われるプログラムについてご記入下さい

Ｑ４：ワークショップの運営について、ご意見をお聞かせ下さい。

Ｑ５：今後もこのような研修を希望しますか？またどのような研修を希望しますか？

□希望する　　□希望しない

【希望する研修内容】

ご協力ありがとうございました。（閉会式前までにご提出下さい。）

３．レポート抜粋

参加者はワークショップ終了後、①ワークショップ参加前・参加後の湯布院に対してのイメージの変化　②研修で得た成果を今後の活動にどのように活かしていきたいかを含めたレポートの作成を行った。以下、参加者のレポートの抜粋を記す。また、③として総括部分の抜粋を記した。

① ワークショップ参加前･参加後の湯布院に対してのイメージの変化

数ヶ月前、ＮＨＫ番組「プロジェクトＸ」の放映を見て、湯布院の町づくりは既に完了したものという印象をなんとなく持った。湯布院には観光目的で足を運んだことはあっても、町づくりという観点で見たことはなかったこともあり、今回のＮＧＯ-ＪＩＣＡ合同ワークショップでは、湯布院の町づくりの歴史や経験といった過去の話を聞いたり、完成されたものを見ながら町づくりについて考えるプログラムなのだろうと参加前は考えていた。

しかし、実際に足を運び、自分の目で見て、肌で感じた湯布院は参加前に想像していた場所とは違っていた。現在も町づくりへの取組みが行われており、また、町づくりに熱い思いを持つ人々の話を聞いて、湯布院の町づくりは完了形のものではなく、現在進行形で進められているのだと感じた。また、本ワークショップで題材として取り上げられた「交通実験」と町づくりとの関連性が参加前にはよく分からなかったが、湯布院町の方々がより良い町づくりのための一環として交通実験を行ったことを知った。

現在進行形の町づくりが行われていることに、はっとさせられたとともに、その町づくりが、昔から町づくりに携わっているベテランの方々のみによるものではなく、次の世代を担う若者も積極的に取り組んでいることを知った。インタビューでのインフォーマントとして協力してくださった旅館主の方は私と同世代であるが、ご本人が湯布院をとても好きで大切にしていることや、これまで町づくりに携わってきている方々を心から尊敬している様子が話し方や表情から伝わってきた。自分の住む町への思いをこんなに熱く語れるインフォーマントが、私にはとても眩しく感じられた。　　（ＪＩＣＡ）

イメージがすでに固まってしまっている観光地“ゆふいん”は、それでもやはりもう一度行きたい場所であることに変わりない。気持ちよく暮らしたい、誰もがそう願う想いを実感し、実践していく湯布院の人に会い、話し、影響を受けた。その人々の姿は、イメージだけの憧れから実存のシンボルと

なった。そのまちづくりに関わった人々の存在は、ただ在ると思われがちな、その地域が、長い年月をかけて人間の力で培われたものだということを知らしめている。その実例は、海外での地域開発と符号していく。　（ＮＧＯ）

一度も行ったことがなかったうえ、有名な温泉地ぐらいしか知識がなかったが、由布岳や金鱗湖、周囲の山々に囲まれた田園風景、そしてもちろん温泉には非常に感銘を受けた。既に有名な温泉地であり、観光という観点で成功しているのは自明なことであるが、そのうえに胡坐をかかず、絶えず問題意識をもってより良い湯布院を目指して年齢・官民問わず努力している姿には心動かされた。また、実際にインタビューを行ったことで、ただ観光客として訪れたのでは知り得なかった住民の皆様の思いをじかに知ることができ、あと１日居たら、住民票を移しかねないくらい、湯布院が好きになった。魅力的な土地・風土、それを誇りに思い守ろうとする住民の皆さんの姿が、特に印象的だった。果たして今の日本に、自分の故郷にあれほど愛着を持ち、誇りに感じている地域があるだろうか。ぜひ今度は観光客として、もっと長い時間滞在したい。（もう一点追加すれば、中谷健太郎さんの話の面白さ・上手さも印象深かった。この人がいればこそ、人が動いたのかもしれない、とも感じた）　（ＪＩＣＡ）

今回のワークショップで，湯布院は九州の避暑地としておみやげ屋さんがならぶ洒落たまちと言う考え方だったのが，ここで生活している人がいる活きたまちであることを気づかされた。　（ＮＧＯ）

湯布院へ行くまでは、「湯布院映画祭」「湯布院音楽祭」などの目立ったイベントを行う人々の取り組みが湯布院のパワーかと考えていたが、町を実際に動かしているのは、多数の小さなグループや住民１人１人の湯布院に対する思いや営みであるのではないか、と考えるようになった。様々な人々のパワーが相乗効果を発揮して町を動かす原動力になっているのではないだろうか。　（ＮＧＯ）

・町民の、町の行く末を思う気持ちもまた、熱く湧き出して絶えないということを知った。
・湯布院の発展の歴史は、これまではレジャーブームに乗ったのかな、という程度の認識であったが、実はその歩みを脅かす外的条件と戦いながら今日に至っているのだということを知り、湯布院町に対する尊敬を新たにした。
・湯布院町では、多くの人が外部資本の無秩序な流入による俗化の進行に対しても問題意識を持っていることを知り、町としては経済的発展とは違う豊かさを大事にしようとしていることを知って安心した。
・湯布院で暮らすいろいろな人々の様子は、発展を志す日本や海外の他の地域にも共通するものであることから、湯布院の発展は特別例ではなくて、一般の人々もまちづくりに積極的になれるということを例示した、庶民発の成功例として身近なイメージを抱くようになった。（ＪＩＣＡ）

②研修で得た成果を今後の活動にどのように活かしていきたいか

（これまで所属する団体では）地域イベントが具体的に地域づくりにどのように統合され、そのような課程に対してネットワークＮＰＯがどのような外部者として介入するのかという議論が見られなかった。

その点で、中谷氏の話からは大きなヒントを得られたと思う。それは、対立的信頼関係と生活圏と生存圏という言葉である。多くの団体がそれぞれの活動をしているときに、ネットワーク団体が一定の方向や一貫性を持たせようとすることは難しい。その時に、連携倶楽部の場合はいい面でも悪い面でも筑後川フェスティバルというイベントを担ってきた人たちが第一世代としてＮＰＯの中心を担っており、この人たちの信頼関係の上に活動を築いていくことの重要性を再確認できた。一方で、生活圏を重視している各構成団体や個人の活動が、生存圏を意識した活動にまで広がっているかどうかは疑問である。特にボランティア学芸員として関わる若い世代を含めた新しく活動に加わる人たちに、自分たちの活動と地域の開発を関連付けてもらうことの必要を再確認できたト考える。この面で、今回のＷＳへの参加を通じて、ネットワーク団体としてどこにボトルネックがあるかという問いに、生活圏と生存圏との連関の意識欠如という明確な答えが与えられたことは大きい。（ＮＧＯ）

所属センターでは研修員受入に際し、ワークショップを導入している。自

分もその実施に関わっているので、他センターではいかにしてワークショップが行われているか、非常に興味があった。参加してみてまず感じたのは、周到な打ち合わせ・準備が行われていたこと。ＪＩＣＡ職員のみならずＮＧＯの方々と準備委員を組織し、事前打ち合わせを 10 回も重ねていたことには驚いた。また、細かいことであるが、小さいグループに分かれてインタビューに向かう際のマップの準備やアポイントメント、車の手配、また会場の設営など、感心することが多かった。実施方法があまりに違うので自分の研修でそのまま適用するのは困難であるが、姿勢だけでも学ぶことが多かった。

（ＪＩＣＡ）

グループ発表では、各グループが工夫を凝らしていた。劇仕立てにしたグループやインタビュー形式、模造紙の表現方法を見易く工夫したグループもあった。他グループも非常に参考になったが、一番参考になったのは同じグループの佐藤剛史さんの作業振りだった。グループワークでは皆の意見をまとめ司会をこなし、同時に要点をまとめてポストイットにおこしていた。また、発表の準備をする際も皆の意見を聴きながら手際よく分類し、それを視覚的に理解し易く、短時間で仕上げてしまった。全てにおいて手際がよく澱みなく、積極的。最終日に全てのプログラムを終え、意見交換を終えた後も、「では発表して下さい」と司会者が言うや否や「はいっ」と両手を挙げてしまった。グループ構成員が顔を見合わせる瞬間もなく。でも佐藤さんが威勢良く手を挙げると「じゃあやるか」って気持ちになるから不思議。ともかく、頼もしくもあり、またその姿勢には学ぶことが多かった。今後はワークショップのみならずイベントに参加する際に、自分が佐藤さんの役割をできたら、と思う。

（ＪＩＣＡ）

湯布院で目にしたことや感じたことを自分が携わる国際協力にどのように活かしたいのか、まだ明確な答えを出せないでいる。しかし、町づくりの経験が国際協力での国づくりにつながるものと感じ、湯布院の方々の話を聞いて印象に残った２つのことを今後の活動上、意識して取り組みたいと思う。

一つめは、住民の声に耳を傾け、住民が共通して持つ目標が何かを見極めることである。本ワークショップにご協力くださった湯布院の方々は次世代を担う子供たちに良いものを残したいという共通の目標を持って町づくりに取り組んでいた。国際協力に関わる外部者が国づくりに協力するとき、自

分たちの経験に基づいて国づくりのあるべき姿を掲げることがあるが、その国に住む人々が外部者の考えるあるべき姿にしたいと思わないのであれば、持続発展性のある国づくりは進められないであろう。住民の声に耳を傾けることの重要性をこれまでも意識していたが、果たしてきちんと耳を傾けていただろうかと考えると自信がない。住民の声を聞きながら、住民共通の考えや希望がどこにあるのかを見極め、住民の声を反映した国際協力の方法を行うためにはどうしたら良いのか、または、自分が考える国づくりのあるべき姿を住民の考えに近づけるためにはどのような活動をしたらよいのかを考えるようにしていきたい。

今後の国際協力活動に活かしたいと考えることの二つめは、人材育成、特にリーダーの育成である。湯布院では、「プロジェクトX」で主役として描かれた方々が現在も町づくりにおいて活躍する一方、次世代を担う若者も町づくりに積極的に取り組んでいる。世代毎にリーダーがいることで町づくりへの取組みがタテ（異世代間）とヨコ（同世代間）のつながりで行われており、こうしたつながりが住民間の意思疎通を活発にして共通した見解や目標形成につながるのではと考える。町づくりや国づくりにおいてリーダーの存在が重要であろうことはこれまで漠然と考えていたことではあるが、タテとヨコのつながりを構築し、持続的な取組みを行うためには異なる世代においてリーダーが必要なのでは感じ、人材育成に関する協力を行う際に参考としたい点である。（ＪＩＣＡ）

---

①それぞれの立場や意識によって、同じ「こと」に対しても問題意識や価値観が違うこと。あれ程多くの人が参加したという交通実験だが、交通問題をさほど問題と思っていない人もいるのだ。一つのことを多方向から見つめることが重要だと感じた。

②どのように底上げを行うかがまちづくりの鍵になること。問題認識や価値観についての差があることは、先に述べたとおりである。渦中にいるはずなのに、問題を問題として認識していない人、その価値に気づいていない人をどのようにして巻き込んでいくかが、問題解決や地域振興を行うために重要だ。

③もともと住んでいた人と、よそからやってきた人の意識との差が、良くも悪くもあること。湯の坪地区の目抜き通りを見て、また、そこに長く住む人の話を聞いて、地域の理想像に対する意識の差があることを感じた。また、ヨソモノから見て価値あるものが地元では当たり前であるため価値として認識されていないことも良くあることである。地元の視点とヨソモノの視点

を常に意識しながら、問題に取り組みたい。

おまけとして、「やっぱり住民参加型！」。湯布院では、行政が動かないから、住民がマチを良くしようと小さなグループで活発に活動をしていると、何度か耳にした。湯布院は、住民主導で築き上げ、守ってきたマチだった。自分たちの手で、マチを作ってきた誇り、自分たちの手でマチを良くしていこうという希望とエネルギーを感じた。やはりトップダウン型よりも、ボトムアップ型の参加型が息の長い活動の秘訣なのだろう。

湯布院に学んだからといって、同じように誇りと希望を持ったまちづくりができるわけではない。しかし、上に挙げたような点を肝に銘じて、これからの活動に臨みたい。（ＮＧＯ）

私は今回住民の暮らしのためのセーフティーネットの重要性を再認識した。途上国の村でも、天災・人災、飢餓、換金作物による負債、外部資本の介入など外部からの脅威が押し寄せている。湯布院も大手外部資本の介入からまちを守りながら、まちづくりを行ってきたし、地産地消で観光と農業の両立を目指してきた。所属団体では、循環型社会を目指して、アジアの住民の村づくりに側面的に協力してきた。具体的には、米銀行、牛銀行、貯蓄、ため池・井戸掘り、有機農業、地場の市場づくりなど地元住民と共に、住民のためのセーフティネットづくりを行っている。また、カンボジアで「持続可能な農業と農村開発」（ＳＡＲＤ）プログラムを行い、農村開発委員会、米銀行委員会、貯蓄のための女性相互扶助グループ（ＭＡＧ）など住民組織づくりを行っている。

単純な比較はできないが、経済のグローバリゼーションが押し寄せるアジアの村々において、湯布院のまちづくりにおける３つの点「まちづくりに対する基本的な思い」、「まちづくりに対する基本設計」、「卓越したリーダーの存在」について共有できる部分があるのではないかと考えている。（ＮＧＯ）

今回のフィールドワークが団体にどうつながるのか。ビデオ、インタビュー、講話から共感する言葉や、関わった人々の人間関係や方法などにヒントが見つけられたように思う。「町が好き」を、「自分の会が好き？」「関わっている国が好き？」に置き換えて考えてみた。自問自答してみた。好きかどうか。湯布院の狭さを活用して狭さを利用する。訪れる人たちにとっても心地良い空間。自分を知る事の大切さ。自分の実力以上の事をすれば、無理し

て息切れがしてくる。

すーと体に溶けこんできた部分でした。会の活動に手を広げるな、背伸びをするな。時々他団体の活動を意識し、今のままで良いのだろうかと考える事はしばしばです。しかし身の丈肩幅は自分が良く知っていて、無理すれば息切れをするのは良く自分がわかっているので、今後も身の丈、肩幅でいけると再確認できた。（ＮＧＯ）

町づくりには少なくとも100年は必要、といわれましたが、ＮＧＯは逆に１年でも早く活動から手を引くのが良いはずです。

「町は呼吸をする」、「会も呼吸をする」外部からの酸素を吸収し、外部からの意見を聞く。何処か町づくりから共通点や、共感を得る部分を沢山教えてもらい、学ばせてもらったと思います。湯布院の人たちの心意気を感じた３日間でした。そして、改めて人財の大切さを学びました。（ＮＧＯ）

ワークショップ型の研修や調査はこれまで何回も参加したことがあったが、日本国内で受けるものはＰＲＡやＰＣＭなど手法を身につけるためのワークショップであったため、国内のワークショップとは何かしら目に見える技術を身につける場であり、応用の場は海外である、という認識があった。このＮＧＯ-ＪＩＣＡ合同ワークショップは、新しい技術を身につける内容ではなかったため、参加前は多少の不満や不安を持っていた。

確かに、技術的に深めるには時間が短すぎたと思うが、フィールドワークの経験がカンボジアでしかなく、国内での経験が無かった私にとって、国内の生の事例を使った調査や議論は、非常に新鮮な経験となった。これまで海外の現場しか目に入らないところが私にはあったと思うが、海外に向いていた目を国内のリソースにも向けることができるようになり、海外と国内の事象を結び付けて考える契機となった。これがこのワークショップに参加した最大の成果であり、今後ＪＩＣＡの国内機関で仕事をするにあたってベースとなる姿勢や確信を得ることができた。

さらにこのワークショップのねらいの一つであろう「ステークホルダーの多様性に対する気づき」も私にとって大きな印象に残った。というのも、カンボジアの初等教育分野では、実のところ明確なステークホルダー間の差異や利害衝突にぶつかることがあまりなかったからである。農村では「教育の普及」という目標に対して、村人の賛同や協力のレベルの差異はありこそす

れ、「教育の普及」そのものに反対する人はおらず、考えうるステークホルダーのほとんどの同意や協力をとりつけることは難しいことではなかったと思う。このように「経済プロジェクト」に関わっていない私にとって、湯布院のように農業・観光と内部・外部の利害が複雑にからみあっているような例は初めてであり、良い経験となった。今後、プロジェクトの審査をするにあたって着目していきたい。（ＪＩＣＡ）

③総括

私が、この合宿に於いて現地に赴き現地で話を聞くことによって、由布院の町と人から教えられたことが３つある。第一に、自分たちを知ろうとする内からの要因、第二に、自分たちを知る外からの要因、第三に、客観的に見て自覚を持ち自尊心を育むこと。この三点に共通するのは、自分と自分の故郷を誇りに思うための道のりであるということだ。

（中略）

「あなたたちの中に湯布院がある」という小林華弥子氏の最後の言葉に、はっとした。私は、自分の住む町にこれほどまでの愛着と自尊心を抱けているのだろうか。それを発信して、模索できているのだろうか。そして、私たちの団体の活動拠点において、相手先の誇りを引き出す活動に結びついているのだろうか。相互に高めあうために、上記した三点を確認しながら、今後の活動に生かしていきたい。（ＮＧＯ）

冬、湯布院の１日は、きらきらと光る靄の中から始まる。畑の土、野菜、藁こづみ、一面が霜に覆われている。その霜は、山の向こうから顔を少し覗かせた朝日に輝き出す。温泉や川、家屋からぼんやりと立ち上った靄は、まだ、空気に消えないでいる。

２日前まで、そんな湯布院は好きでなかった。できすぎている。大分県人である私は、その、できすぎた風景とそこを訪れる大勢の観光客を冷めた目で見ていた。

でも、今は違う。この景色を見ながら、この景色の奥に、この景色を守ってきた人々、守ろうとする人々の想いや努力が見える。だから、この湯布院が好きになった。そして、それが私にとってのＮＧＯ-ＪＩＣＡ合同ワークショップの最大の成果である。（ＮＧＯ）

今回のワークショップで一番感銘したのは、グループ発表の講評でのコメンテーター（旅館／飲食業）の発言だった。毛受氏の「海外への視察は時代遅れ」とのコメントにもきっぱり「これかも続けます」と、そして「湯布院を愛しています」との発言。町づくりに携わる活力あふれる若者の存在の背後には中谷氏の世代の功績が大きいと思う。“人造り”はさまざまな要素が複雑に入り組んでいるのかもしれない。（ＪＩＣＡ）

今回のワークショップに参加するにあたって、「まちつくり」というテーマから自分はいったい何を得るものがあるのだろうか？と言う疑問が心のどこかにあった。それは湯布院という場所は「観光」があった。しかし、観光のない場所ではどのようにすればいいのか、その答えが見つかるのか不安であった。でも、それは心配することはなかった。地域にはそれぞれの特性というものがあり、湯布院ではそれが「観光」であったが他の地域ではそれ以外のものが必ずある。なぜならそこに人が住んでいるから、そこで生活しているからである。それは農業であったり、工業であったり、様々だと思う。それを活かしていけばいいわけである。しかし、忘れてならないのは、湯布院を怜にとれば「観光」という目玉は必要であるが、「農業・林業・畜産・観光」が組み合わさって「まちつくり」が成り立っているということである。一つの目玉では「よりよいまちつくり」はできないのである。よく見ようとしていなかった自分の町を見直すいい機会になった。（ＮＧＯ）

今回のＮ－Ｊワークショップで逆に思ったのは、（今回の経験を今後の国際協力活動にどう、活かしていくかに関することだが）このような開かれた市民社会の町であっても、例えば交通実験だが、一つのものを作り上げていくのがどれほど困難なことか。多くの利害関係者がいて、その意見を様々にしているもののなかから、一つのものを作り上げていくことの難しさ。これは発展途上国において、言葉も文化も異なる国からやって来た調査員によるフィージビリティ・スタディが、果たしてどれほど意味のあるものなのだろうか、どれだけ住民の意見や考え方を反映したものであるのだろうか、援助する側の責任という問題を、今回の湯布院での体験は改めて問いかけてきた。ＪＩＣＡだけではなく、ＮＧＯも海外での援助活動をする際には、「援助」というものを改めて見つめなおしていくことが、ＯＤＡ５０周年を迎えた現在に求められていることなのかもしれないと思った。援助の際に、どれだけ

ドナー側の住民の意見が汲み取られたのか、それをどう評価していくのか。今後、私はＮＧＯでの国際協力活動の中で、途上国への援助を行う援助機関のフィージビリティスタディの監視や政策提言活動を、情熱をもって続けていかなければならないと改めて感じている。今回の湯布院で見たこと、感じたこと、特に「対立的信頼関係」の概念から「国際協力」を考える作業を所属団体内で行ってみたいと思う。（ＮＧＯ）

研修を終えた今、湯布院は、湯の坪地区を中心とした賑やかな観光地ということを知り、観光客と外部の観光業者と住民、住民の中でも観光業者と農業者の間にさまざまな差や観光地ゆえの問題などを抱えていることを知った。

しかし、それ以上に、湯布院を想う人の心に触れた。それゆえに、今、私の抱く湯布院に対するイメージは、「幸せなマチ」だ。外部の人間がふらっと訪れて、温泉につかって、美味しいものを食べて幸せ …というわけではない。湯布院には、幸運なことに温泉という資源があった。それを活かせる中谷さんというリーダーがいた。中谷さんには共に歩む仲間がいた。そして、今、湯布院のことを真剣に想う若者がいる。確かに、様々な問題を抱えていることは、短い間だったが十分感じた。しかしそれを差し引いても、こんな「幸せなマチ」は、日本の中に一体どれぐらいあるのだろう。私の故郷は、「幸せなマチ」だろうか。そんなことを考えると、羨ましくなるぐらい湯布院は「幸せなマチ」だと感じる。

最後に、二日目の晩、時間に追われながら温泉につかり、「一晩中、温泉が開いていればいいのに…」と思ってしまった。しかし、一晩中開けておくには、管理をする人が誰か付いていなければならない。毎日、一晩中管理する負担は旅館の人、湯布院の人にかかる。それは、その人にとって幸せなのだろうか。確かに、お金は入る。けれども、訪れる人は、お客さんだからと言って、いくらでもわがままを言って良いわけではない。お互いに、譲りあうところは譲り合う。訪れる人も、宿主を気遣う心を持って滞在する。住んでいる人も、訪れる人も幸せなマチ、湯布院が目指している「クアオルト」とは、こういうことかなとふと思った。（ＮＧＯ）

今回、題材として扱われたのは「交通実験」。交通実験そのものは、おそらく成功の部類には入らないでしょう。交通実験後のアンケート結果は「交

通実験より先に話し合うことがあるんじゃないのか？」と考えている人が40％もいた、とも解釈できます。「言ったところで自分たちの意見は聞き入れてもらえない」と感じている（あるいは何事にも無関心）のかもしれません。この人たちをいかに巻き込むことができるかが参加型開発の核になってくると思います。「自分の意見は無視されている」と人が感じてしまったとき、その議題に対して関心が薄れるのは当然ではないでしょうか。

しかし、この結果を「積極的な失敗。試行錯誤の一環」と位置づけるのであれば、交通実験は今後の貴重な資料になるでしょう。これだけライフスタイルが多様化した日本の社会において、交通実験は数ある「切り口」のひとつです。そうした「切り口」を増やして話し合いを重ねていく事で「自分の意見は無視されている」と感じさせないようにする。そして住民の自発的な参画や住民どうしの信頼関係につながっていくのが理想、と私なりの結論に至りました。　（ＪＩＣＡ）

V. 参 考 資 料

参考資料１

参加者リスト

1	ラフマン　モクレスール	バングラデシュと手をつなぐ会	福岡
2	木村　理恵	ＮＧＯ福岡ネットワーク	福岡
3	大木　克孝	（特活）明日のカンボジアを考える会	福岡
4	石橋　龍太	日本国際ボランティアセンター 九州ネットワーク	福岡
5	井浦　真須巳	地球共育の会・ふくおか	福岡
6	井上　昭子	国際ボランティアを育てる会 ＡＩＭ	福岡
7	瀧本　昌平	Ｎｅｔｗｏｒｋ　ＮＯＤＥ	福岡
8	川崎　章恵	（特活）　環境創造舎	福岡
9	工藤　憲孝	地球市民教育ネットワーク鹿児島	鹿児島
１０	谷川　政敏	熊本国際化センター（ＫＩＣ）	熊本
１１	一瀬　洸	熊本国際化センター（ＫＩＣ）	熊本
１２	松崎　美和子	国際こども支援団体〝Ｈ＆Ｈ〟 （Ｈｅａｒｔ ａｎｄ Ｈａｎｄ）	宮崎
１３	吉野　あかね	ＮＧＯ福岡ネットワーク	福岡
１４	椿原　恵	ＮＧＯ専門調査員	福岡
１５	藤井　大輔	ＮＧＯ福岡ネットワーク	福岡
１６	重田　康博	日本国際ボランティアセンター 九州ネットワーク	福岡
１７	佐藤剛史	特定非営利活動法人　環境創造舎	福岡
１８	内田　義弘	（財）福岡ＹＭＣＡ	福岡
１９	原田　君子	くるんて～ぷの会	福岡
２０	西川　芳昭	（特活）筑後川流域連携倶楽部	福岡
２１	西嶋　克司	（特活）明日のカンボジアを考える会	福岡
２２	松久　逸平	ＪＩＣＡ国際協力総合研修所	東京
２３	鈴木　智博	ＪＩＣＡ中国	広島
２４	中谷　康子	ＪＩＣＡ九州　業務課	福岡
２５	天池　麻由美	ＪＩＣＡ九州　総務課	福岡
２６	山崎　潤	ＪＩＣＡ九州　業務課	福岡
２７	小林　恵子	ＪＩＣＡジュニア専門員	福岡
２８	嶋村　有美子	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（北九州）	福岡
２９	川原 規之	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（長崎）	長崎
３０	徳永　まどか	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（大分）	大分

３１	丸野　里美	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（鹿児島）	鹿児島
３２	北村　祐子	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（佐賀）	佐賀
３３	田崎　弘	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（熊本）	熊本
３４	辻　亜由美	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（宮崎）	宮崎
３５	坂部　英孝　（事務局）	ＪＩＣＡ九州　業務課	福岡
３６	岩﨑　真紀子（事務局）	ＪＩＣＡ九州　業務課	福岡
３７	坂本　倫子　（事務局）	ＪＩＣＡ九州　国際協力推進員（福岡）	福岡

参考資料２

準備委員会リスト

ＮＧＯ福岡ネットワーク事務局長／地球共育の会・ふくおか代表	吉野　あかね
同　　副代表	藤井　大輔
NGO 専門調査員	椿原　恵
くるんて～ぷの会　　代表	原田　君子
ＪＶＣ九州ネットワーク　代表	重田　康博
（特活）明日のカンボジアを考える会　事務局長	西嶋　克司
特定非営利活動法人　筑後川流域連携倶楽部　事務局次長	西川　芳昭
（財）福岡ＹＭＣＡ	内田　義弘
特定非営利活動法人　環境創造舎　代表理事	佐藤　剛史
ＪＩＣＡ九州　業務課	坂部　英孝 （平成 15 年 10 月 1 日より）
同	岩﨑　真紀子 （平成 15 年 12 月 5 日より）
同	加藤　有紀 （平成 15 年 10 月 1 日より 10 月 23 日まで）
同　　総務課	天池　麻由美 （平成 15 年 10 月 23 日まで）
同　　国際協力推進員（福岡）	坂本　倫子
同　　国際協力推進員（北九州）	嶋村　有美子

第３回 NGO-JICA 合同ワークショップ

地域で活かす、地域を活かす国際協力
―誰のための参加型開発？―

募集要項

日　時：2004 年1月 30 日（金）～2月１日（日）

場　所：JICA 九州／湯布院

主　　催　：第３回 NGO-JICA 合同ワークショップ準備委員会
NGO 福岡ネットワーク、JICA 九州

後援（予定）：福岡県、北九州市、大分県、湯布院町
（財）福岡県国際交流センター、（財）北九州国際交流協会
（財）大分県国際交流センター

誰のため？何のための参加型開発？

近年、開発途上国においては、地域住民や団体を核とした住民参加型開発が行われています。一方、日本においては、様々な地域で自治体や住民により、自らの問題を自らが参加して改善する動きが拡大し、「地域づくり」「地域おこし」「まちづくり」などの地域活動が活発に行われています。

今回の研修では、日本における地域活動から、国際協力が必要とする住民参加のプロセスやノウハウ、視点などを学び、「誰のため、何のため」の参加型開発かを考え、自身の国際協力活動へとつなげていきます。

1. 目的

①NGO 及び JICA 等の関係諸機関が、お互いの目的・活動内容・課題等について理解を深める。

②NGO 及び JICA 等の関係諸機関の今後の活動をよりよいものにするため、地域づくりの実践事例を通じて、『参加』の意味と経験を共有する。

③国際協力活動に携わるNGO及びJICA関係者の能力向上と新たな連携の構築を目指す。

2. 実施日時

2004 年１月３０日(金)１９：３０～2月1日（日）１７：００

※1月３０日（金）は１９：００より受付を開始します。

3. 実施場所

JICA 九州　及び　湯布院

「なぜ湯布院？」

観光地として発展を続けてきた湯布院。

そこにも最近様々な課題が発生しています。その一つが「交通問題」。

今回の研修は、昨年湯布院でまちづくりの一環として行われた「交通実験」を題材に、住民とは？住民のニーズとは？参加とは？などをフィールドワークを通して考え、自身の国際協力活動へ活かします。

4. 募集人数

３５名

※各団体より基本的に１名の参加とします。応募者多数の場合は準備委員会にて選考し、１月１８日（日）までに本人及び推薦団体に通知します。

5. 募集対象

九州７県内の国際協力に従事するNGO及びJICA等スタッフ

6. 参加費用　6,000円

（内訳：湯布院宿泊費一部負担3,000円、２日目懇親会費3,000円）

その他、２・３日目の昼食代は各自ご負担下さい。

7. 交通費・宿泊費

（1）交通費について

・受講にかかる交通費は、ＪＩＣＡ規程（最短・最低料金区間）により支給いたします。

・２月１日のプログラム終了後は、ＪＩＣＡのバスで以下のＪＲ各駅までお送りします。

ＪＲ由布院駅・ＪＲ大分駅・ＪＲ鳥栖駅・ＪＲ博多駅

（但し、バスで移動可能な区間は交通費は支給いたしません。）

（2）宿泊費について

・１月３０日（金）JICA 九州宿泊及び２月１日（土）湯布院宿泊の一部をJICAが負担します。

・２月１日（土）湯布院での宿泊先は準備委員会で参加者すべての予約をします。ただし、相部屋となる場合もありますので、あらかじめご了承ください。

8. 応募条件

①当該団体代表者の推薦があること

②全日程への参加が可能なこと

③国際協力分野での活動経験を有する者で、かつ今後も同分野での活動を継続する予定の者が望ましい

9．レポート提出について

ワークショップで得た成果の所属団体への活用法などをレポートにまとめ提出していただきます。書式などについては、ワークショップ当日にお渡しいたします。

１０．申し込み方法

参加申込書に必要事項をご記入の上、ファックスもしくは郵便にて送付してください。

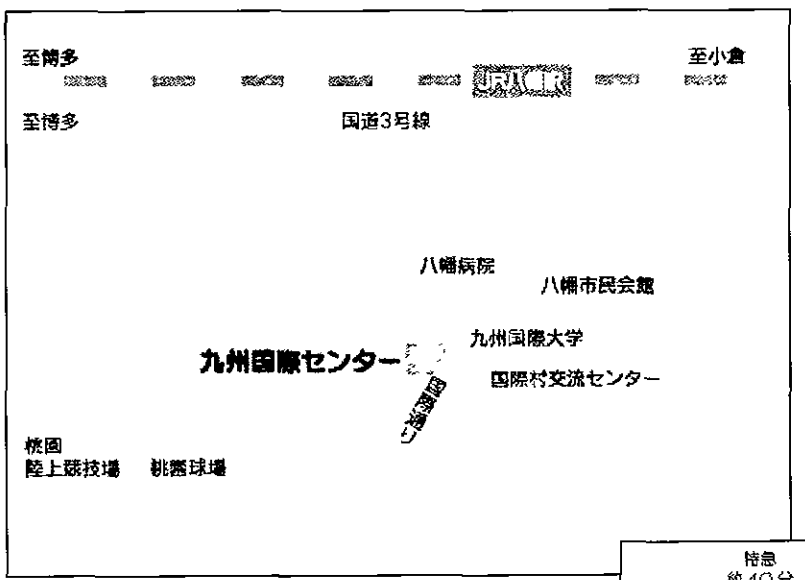
１１．申込締切　　１月７日（水）必着

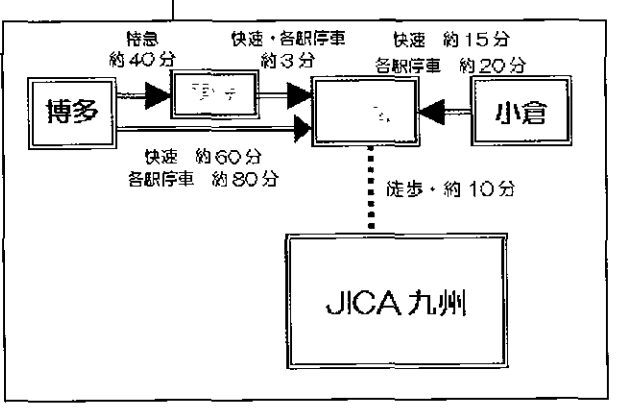
１２．問い合わせ先

JICA 九州　業務課　坂部・岩﨑

TEL：093-671-6311　FAX：093-663-1350

【案内図】http://www.jica.go.jp/branch/kic/map.html





プログラム

1月30日（金）	
19:00	受　付　　※食事は各自すませてからご参加ください。
19:30～21:30	オリエンテーション アイスブレーキング（自己紹介）　※ＪＩＣＡ九州宿泊
1月31日（土）	
7:30	集合
7:30～10:00	移動 ※ＪＩＣＡにてバスを用意します
10:00～15:30	オリエンテーション後、フィールド調査、まとめ
15:30～16:30	講義　「参加型開発再考（仮）」
16:30～18:30	グループワーク
18:30～20:00	懇親会 ※湯布院宿泊
2月1日（日）	
9:00～10:00	グループワーク発表準備
10:00～12:30	グループ発表
12:30～13:30	昼食
13:30～14:00	NGO-JICA による連携事業　～草の根技術協力～　の説明
14:00～15:30	草の根技術協力　事例紹介
15:30～15:45	休憩
15:45～16:45	意見交換会
16:45～17:00	閉会式

※各自、筆記用具をご用意ください。

※プログラムは変更の可能性があります。予めご了承ください。

◇　ＮＧＯ－ＪＩＣＡ合同ワークショップ参加申込書　１　◇

担当：JICA 九州・業務課　坂部／岩﨑行　Fax：093-663-1350　締切：1月7日（水）必着

フリガナ				性別
氏名				男・女
連絡先（ご自宅）	住所	〒		
	電話		ＦＡＸ	
	Ｅメール			
所属団体の概要 ※ 団体の資料があれば、添付してください。	名称			
	団体の概要			
	団体の設立年		スタッフ数	名
	住所			
	電話		ＦＡＸ	
	ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ			
	応募者の担当業務			
応募者の国際協力分野での実務経験（現在の所属以外の経験も含め具体的に記入してください）	年　月			
今回のセミナーに対する期待・希望				

上記の者が、NGO-JICA 合同ワークショップ能力向上研修に参加することを承認します。

平成 15 年　　月　　日　　所属先団体代表　　印

◇　ＮＧＯ－ＪＩＣＡ合同ワークショップ参加申込書　２　◇

独立行政法人　国際協力機構
　九州国際センター所長　殿

「第３回 NGO-JICA 合同ワークショップ　地域で活かす、地域を活かす国際協力」の募集要項の内容について承諾し、同セミナーに参加を申し込みます。

なお、旅費については下記の口座に振り込み願います。

平成　　年　　月　　日

現 住 所：〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏　　名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

振込口座：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿銀行＿＿＿＿＿＿支店

普通・当座　口座番号＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

名義人（ふりがな）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＊なお振込口座は本人名義のものに限ります。

自宅から JICA 九州までの交通経路	（バスを使用される場合は、運賃と会社名をご記入下さい） 自宅（最寄り駅／バス停：　　）→ →JICA 九州

湯布院会場から自宅までの交通経路	会場　→（JR 由布院、JR 大分、JR 鳥栖、JR 博多） → →自宅